
ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、それだけを知りたい

【Nコード】

N4776Z

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

土砂崩れで死んだ、1人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられていた。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか……。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だったろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに気分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、1度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世も現世も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思っている。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わった。

在り方も変わった。

変わらなかったものなんて、見付かりそうにないくらい変わった。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・ス
ーツ。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄^{モノ}。

「ちいっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ISさえ無ければ、俺のこの第2の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は——否。

居もしない存在に文句を言ったところで、壁に怒鳴るのと同じだ。

そんな無駄な事、してもしょうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「……………」

分かり切っている。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「……………時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと——初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『IS学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう1度、同じ言葉を呟いて。

本当の『3人目』

6月終盤。

ここISS学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となった時節。

しかして今日この日は、何事も無く過ぎ去るごく普通の日。

その筈だった。

「転校生？ また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な筈。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかったか？」

「いやそんなまさか」

危ねえ。心を読まれた。

「けど、やっぱり1組なのかな？」

そう言ったのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そうらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だったりしてな」

「それこそ有り得んだろう。男のＩＳ操縦者は、お前と……」

ちらと、教室の一角を一瞥する筈。

そこには、ラウラとセシリアを相手に話しかけているもう一人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆って……そりゃ言い過ぎだぞ筈」

「あのような輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

ブイツと顔を背ける筈。余程あいつが嫌いらしい。

筈だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるラウラやセシリアも、思いつきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になって話しかけてるあいつが、何だか可哀想になってきた。

よし。ここはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さりげないフォローを――

「お前達！ ホールルームだ、さっさと席に着け！」

しようと思ったところで、千冬姉が出席薄片手に教室に入ってきた。すまん、無理だった。

刹那、イグニッション・ブースト『瞬時加速』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたあ……」

いつものようにボタンタッチされた山田先生から、いつもと違っ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「ええっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホー
ムルームの前に、転校生を紹介したいと思います……もうほんと勘
弁してください、私の睡眠時間が、ああああ……」

今にも処理落ちしそうだ。惨い。

「転校生だと!?!」

バン、と立ち上がる音。

振り返ったら、後ろの席であいつ……銀崎^{ぎんざき}が驚いた風に山田先生
を見てた。

てか、あいつ知らなかったんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄く詳しく知ってたから、
そういった情報に関しては通だと思ってたけど。

「席に着け、銀崎」

「っと……すみません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出ていた。

「（しかし本当に1組だったな。もう今更だけど、本当に分散させていないのか？）」

至極まっとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあった気がする。

「……………」

無言の入場。あ、これも前にあったパターンだ。

よし、『P・^{パターン}ラウラ』と名付けよう。今決めた。

うんうん、俺って結構センスあるんじゃないか？

「……………」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えている事に気付いた。

何だ？　今度は『P・シャルル』か？

「……………へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣って。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なら。

その転校生が——俺が半ば冗談で言った通り、『男』だったのだから。

2人の転生者

さて。俺は今、ひっじょーに困惑している。

え？ 俺は誰かつて？

そんな！ この俺、銀崎飛竜ひりゅうを知らない！？ 寄る年波の所為でボケた神様に間違つて殺され、その侘びとしてここ『インフィニット・ストラトス』の世界に転生させて貰つて、ヒロイン達で構成したハーレムを築く為に日々奮闘しているこの俺を！

……どうにもフラグ立てが難航してて、未だ1人も落とせてないけど。

箒や鈴はまあ仕方ないにしても、他の3人はいけると思ったのに。原作ではどうなるにしろ、少なくとも最初の条件は一夏の野郎とイーブンだったんだから。

けど実際は、クラス代表決定戦では一夏と違って俺は専用機到着が間に合わず、結果セシリアと戦う事無く棄権。一夏にまんまとフ

ラグを盗られた。

シャルロットとラウラの時だって、何故かいいタイミングで必ず何らかの邪魔が入って撃沈。これが原作の修正力ってやつか！？

だが俺は諦めない！ 元はライトノベルだろうとここは現実、アピールを続ければきつといつかは報われる筈だ！

もつとも彼女達からすれば、同性ゆえに一夏が気安く接してくる俺は、云わば邪魔な存在らしくて邪険に扱われる事もしばしばだけど。

ああいや、それとも気を引こうと色々やったのが問題だったんだろうか……悩む。

おまけで神様から頭脳や運動神経、それに一夏級のイケメンフェイスを貰ったから、見てくれとかが原因とは思えないが。

……まあいいさ！ 学生生活は始まったばかり、まだまだチャンスはてんこ盛りだ！

それに例え、今の5人が駄目だったとしても。まだ生徒会長の更識楯無に妹の簪、臨海学校で出会うナターシャさんとか、美人は山ほど居るし！

ちなみに更識姉妹とはまだ接触してない。楯無先輩は迂闊にこちらから接触したら怪しまれかねないし、簪の方は純粹に見当たらない。

4組も整備室も結構風漬しに探してんのに、なんで？ いつも行

った時居ないんだよな。

仕方ないから、気長に向こうからアクション起こすのを待ってる。

……俺の現状はこれぐらいでいいか。それより今は緊急事態だ。

「では……自己紹介を、お願いしますう……」

静まり返った教室、電子パネルの前に立つ男。

そう、『男』なのだ。

ラウラよりも長い、腰どころか膝まで伸びた赤髪。

若干吊り上った双眸に収められた、無機質染みた黒い瞳。

ほっそりとした整った顔立ちに、右眼の下から頬にかけて、ムカデのようなタトゥーが刻まれてる。

普通だったらあいたたたーなその装飾が、とんでもなく様になってた。

全体的に細身だが、軟弱さや貧弱さがまるで感じられない。

そして極めつけは、着ているその学生服。

IS学園の男子制服は、一夏や俺が着ている襟元だけ黒く、全体が白の配色がベースだ。

けど赤い髪の男はそれが逆転してて、襟元だけ白く全体が黒の制服姿。

なんかこう、ダークヒーローっぽくてカッコいい。是非真似してえ。

けど簪が好きそうじゃないなあれ、止めた。

「……………」

とにかく、バカみたいな美形。

あんな見てくれ自然発生するわけねえ。どう見ても俺と同じ『転生者』だ。

「そつだ、そつに決まってる……………」

「私語は慎め銀崎」

バゴス！

「ぐへらっ！？」

織斑先生に出席簿で殴られた！ 滅茶痛え！

……と、とにかくだ。あいつが転生者ならば、これから先俺のハーレムを築く障害になりかねない。

ただでさえ難航してるつてのに、これ以上敵が増えるなんて御免だ！

……………ここは一発睨みを利かせておくか。

喰らえドラゴンアイ！！ 飛竜だけに！！（ただのガン飛ばし）

「……………」

気付かれさえしなかった。泣きてえ。

つつかこの野郎、何で目にハイライトが無いんだよ！ その所為で何見てんのかさっぱり分かんねえよ！

ああ遣り辛い！ てかいいい加減なんか喋れよ！ 「またですか？」って、山田先生泣きそうになってんじゃない！ 泣いてても可愛いな畜生！

それにラウラが「何か転校初日の私を思い出す、鬱だ……」とか落ち込んでるじゃねえか！ 俺の未来のハーレム要員に何しやがる！！（現在好感度最低）

これからこのクラスの一員としてやっていく気あんのか？ 無い

なら無いで俺は助かるが。

「……………ふう」

……………お？　ようやく口を開けたぞ。

さあどうなんだ。フレンドリーにするのかしないのか！

「……………」

口を開けて、少々の間を置いて。

紡がれた言葉を聞いて、俺は心底安堵した。

「……………雌臭い……………最悪、だな」

ああ。こいつクラスに馴染む気、全く無いや。

気分次第のコイントス

「……………雌臭い……………最悪、だな」

教室に入った最初の感想としては、これが最も適切だろう。

一瞬前と比較してあからさまに空気が凍りついたが、別に気にするような事じゃない。

「複数の香水やらコロンやらが混ざり合って、花が腐ったような酷い臭いだ。これが普通だと言うのなら、俺は明日からガスマスクを持つてくる必要がある」

「……………ふ、ふええ……………」

俺の横に居る背の低い副担任……………確か山田。

そいつが何か言いたげに涙目で俺を見ているが、生憎発言を改める気は無い。

黒髪の担任は、今のところノータッチを決め込んでいるみたいだしな。

「ああ済まない、自己紹介だったか？　だがしかし、ただクラスが同じだけの腐臭を放っている輩どもに、果たして名前を教えてやる必要があるのだろうか」

「何という暴君、ラウラより酷い」

「銀崎！　私と比べるな！」

教室の後方に居た男のぼやきに、眼帯を付けた銀髪のチビが怒鳴る。

……何で小学生が混ざってるんだ？　飛び級スキップにしても幼過ぎる気がするが。

「銀崎、ボーデヴィツヒ、黙れ。それとお前も、自己紹介ぐらいまともにやれ」

流石に目に余ったらしく、黒髪の担任から咎められた。

けれど足りない。まだ俺の人格を知らしめさせるには、少しばかり

り。

「ふん……自己紹介、自己紹介ね」

やる意味は無いが、やらない理由も無い。

そしてやらなければ、いい加減横の副担任が泣きそつだ。

仕方ない。いつものアレで決めよう。

「こいつが表なら、やるとしよう」

ポケットから出したのは、愛用のコイン。

親指に挟んで、弾いた。

くるくると回り、落ちてきたところをキャッチする。

手の甲と掌で挟まれたそれを――

「……………っ」

祈るような目で見てゐる山田が居た。

バカなのかこいつ。必死過ぎるだろう。

担任の方は、やはりノータッチだ。

山田に任せてるのかどうか知らないが、少しは助けてやったらどうだ？

原因である俺が言えた義理ではないが。

「……………ちっ」

どうでもいい事を考えつつコインを見てみれば、表。

これで俺は、自己紹介する事を余儀なくされたわけだ。

「ふん、運が良かったな」

「はふう……………」

安堵する山田。小動物か。

ポケットにコインを戻し、改めて教室を見据える。

……………とは言えど、俺の駄視力では精々人数ぐらいしか把握出来んが。

「担任。自己紹介とは名前だけでいいのか？」

「目上には敬語を使え……散々待たせたんだ、好き嫌いや特技も言え」

「自分勝手だな。まあいい」

よく見えはしないが、恐らく教室内の殆どが「お前が言うな」と思っているのだろう。

俺の最初の発言からして、歓迎ムードとは程遠い空気だしな。

「久々津・オテサーネクだ。好きなものは無い、嫌いなものはたつた今からお前達だ。特技は絵」

我ながら何とも投げ遣りだな。

当然誰も何も言わない。異質にして異物な俺に対して、持ち得る感情を見失っていると言ったところか。

だがこれでいい、これで。

「で、副担任。俺の席はどこでしょうかね」

「……………あ、ふえ、はいっ！ あ、あああそこですっ！」

言葉を失っていた山田が、慌てたように教室の隅を指す。

無言の室内を歩き、俺は席へと向かった。

「な、なんなのあの人……」

「怖いよ……」

ぼそぼそと聞こえてくる囁き。

どれも、俺に対して否定的なものばかり。

「（そうだ、これでいい）」

これで――

誰も俺に、近付かない。

嫌われ者の赤松

「何なのだあの男は！」

食堂のテーブルを叩き、憤慨する篤。

おい止めるよ、壊れるって。

「全くですわ！ 当然のように無礼を振る舞うあの姿勢、気に入りません！」

「転校当初の私はあれに近い感じだったのか……凹むぞ」

「あ、あはは……」

セシリアは篤に全面同意、ラウラは少なからず自分の行いを思い返して落ち込みモード。

例によって、シャルロットは苦笑気味だ。

「そんなに酷いわけ？」

「そりゃあもう。朝の自己紹介以降全然喋らないし、誰とも目さえ合わせようとしない。山田先生最後の方泣いてたよ」

「あんたには聞いてないのよ銀崎」

「酷い！　せつかく教えてあげたのに！」

唯一クラスが違う鈴の質問に答えたのは、俺が昼食に誘った銀崎。

鈴、確かにそれは酷いぞ。

銀崎は結構いい奴なのに……たまにおかしなこと言うけど。

「……し、しかも泣いてる山田先生に向かって何て言ったと思う！
？　「ぴいぴい泣くな駄メガネ、鬱陶しい」だよ！？」

「しつこいわねあんたも……けど、確かに引くわその言い草」

「流石にそのあと千冬姉に叩かれたけどな。山田先生が可哀想だったよ」

「その様を見て、あいつはあろう事か薄らと笑っていた。最低の男だ」

篝のひと言に、うんと頷く皆。

……確かに久々津の行いは行き過ぎてる。けど俺としては折角の
数少ない男子なんだから、できる事なら仲良くしたい。

そしてその為には、あいつがちゃんとクラスに打ち解けなくちゃ
ならない。

「織斑。あのムカデ野郎と仲良くなんて無理だと思うぜ」

「休み時間の度にどっか行っちゃまうから、話し合っにも切っ掛けが
……って、銀崎？ 俺口に出してた？」

「顔に出てた」

何てこった。だから千冬姉にも心が読まれるのか。

ポーカrfフェイスの練習した方がいいか？

「向いてないから止めとけ」

「学校唯一の男友達が冷たい……」

銀崎って時々辛辣じゃないか？ 主に俺に。

そう思ってたら。

「「「「「.....」」」」」

「ひいっ！ ご、ごめんなさい！！」

何故か銀崎が皆に睨まれてた。

あろう事がシャルロットにまで。どうしたんだ。

「くっ、この気安さ.....」

「羨ましいですわ.....」

「むう.....」

「ある意味1番の敵よね.....」

「やはり消すか.....」

「ひいっ！ すみません消さないで下さい！」

「ラウラぁッ！？ ナイフ仕舞え！」

何故か危うく友達を1人亡くすところだった。

ラウラの考えてる事は、相変わらずさっぱり分かん。

……他の奴なら分かるのか、と言われても困るけど。

「ところで一夏、『ムカデ野郎』ってなに？」

「え？」

ああそうか。鈴だけクラスが違うから知らないのか。

「転校して30分でクラスに定着した久々津の渾名だ。右目の下に
ムカデ蛇のタトゥーしてるから」

「蛇？」

「そう！　それがムカつくぐらい様になってるのなんのって……爆
発しろ！」

「あ、あはは……銀崎君、そこまで言わなくても……」

人の良いシャルロットが、まあまあと銀崎を宥めてた。

……それにしても、やっぱり『シャルロット』って少し長いよな。
それに折角の呼び名が普通になっちゃったし、何か呼びやすい渾名
でも考えようか……？

まあ、それに関して今はいいとして――

「それにしても、蛸ね……あ、それってあんな感じの?」

「うん?」

鈴が指差した先を向いてみる。

そこには。

「……………」

「……………なあっ!?!」

何時の間にか、俺達と同じ席でロールパンを食べてる久々津が!

俺を含めた鈴以外の全員が、同時に声を上げた。

「き、ききき貴様!?! 何時からそこに!」

「さっきから居た。他に席が空いてなかったからな」

「え? 本人?」

ラウラの問いに、淡々と答える久々津。

と言いかもしかして、今までの会話全部聞かれてたのか!?

「……お前達が、俺に対して何を思おうが勝手だがな」

聞かれてたよ! き、気まずい……。

「ひとつだけ、言うておく」

そう言うつと、久々津はロールパンを飲み込んで、ゆらりと席を立った。

そして無機質な黒い眼で、俺達をゆっくりと見回して――

「^{これ}タトウーは、アカムカデだ」

頬の蚣をひと撫でして。

ぼそりと呟き、行ってしまった。

いや。確かに赤いけれども。

「一夏……俺、あいつのキャラが分からなくなった」

「奇遇だな銀崎……俺もだ」

けど、なんか……やっぱり根っこから悪い奴だとは思えないんだ
よな……。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

銀「つーわけで、オリキャラ紹介だ！」

久「……何故俺まで」

？「諦めなさい。面倒なのは理解しているけれど、これも主の定め
た事」

銀「へ？ あんた誰？」

カ「私の名前はカーテン。神の代行者」

銀「神ってあのボケ爺さんかよ。こんな美人の秘書が居たんなら紹
介して欲しかった」

久「神など居ない……下らん」

カ「そう思うのはあなたの勝手。けれど私がどう名乗るかも私の勝
手。……違って？」

久「……好きにすればいい」

カ「聞き分けの良い子は好き。あなたのような暗い目をした子は特
に」

久「……お前。俺をどこまで知っている」

カ「すべてよ。可哀想なキメラの子」

久「……………」

銀「なんか前書きにあるまじきシリアスなんだけど……………」

オリジナルキャラクター紹介

名前：久々津・オテサーネク

年齢：15歳（生年月日不明）

身長：175センチ

体重：54キロ

血液型：A B

容姿：膝まで伸ばした血のように赤い髪、光の無い無機質な黒い瞳を持つ。一切の贅肉と無駄な筋肉を削ぎ落とした、柳のような体つき。右目の下に、赤で彩られた蚣のタトゥーを刻んでいる。

出身：不明

帰属国家：無し

転生者。出鱈目な履歴で過去の全てを覆い隠された、正体不明の人物。他人を寄せ付けず、意図的な言動で人を突き放している。世

間的には『世界で3番目の男性IS操縦者』とされているが、その不透明な出自から、専用機を与えられている他2名とは異なり、逆の恐れありとしてISに搭乗することを許されていない。生体データを取る為の保護という形で学園に通わされているので、授業への出席は義務付けられていない。又、学園の外へ出る事も不許可となっている。

IS適性はC。

イメージCV：関俊彦

(最遊記RELOAD「玄奘三蔵」

機動戦士ガンダムSEED「ラウ・ル・クルーゼ」など)

イメージソング：『Over the clouds』

(『GOD EATER』OP)

名前：銀崎飛竜
ぎんざきひりゅう

年齢：16歳(4月30日生まれ)

身長：172センチ

体重：60キロ

血液型：O

容姿：茶色の短髪に赤い瞳のイケメン。中肉中背だがしっかりと筋肉は付いている。

出身：日本

帰属国家：日本

『世界で2番目の男性IS操縦者』にして、神の手による転生者原作キャラクターによるハーレムを目指しているが、いかんせん間が悪く空回りしている。一夏とは友好的な関係を築いており、それが彼女達との溝を深めていたり。悪い人間ではないのだが、その生来の在り方からか3枚目と称されており、女子生徒達からの評価は「友達にはいいけど恋人にはちょっと……」らしい。

母の勤め先である、とあるIS企業にテストパイロットとして所属している。実はラウラより強い。

IS適性はS。

専用機は4脚型IS『牙神』。

イメージCV：森田成一

(BLEACH「黒崎一護」

戦国BASARA「前田慶次」など)

イメージソング：『BRAND NEW WORLD』

(『ONE PIECE』の)

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

銀「……なんか、俺とムカデ野郎とで紹介文の温度差がすごい違うんですけど」

久「知るか」

カ「それもまた定め。世界に与えられた役目の違い」

久「……………俺に、役目など……………」

カ「きつとあるわ。私には、まだ見えないけれど」

久「……………」

カ「迷って。迷子の果てに見つけるものもあるのだから」

銀「俺もこの前道に迷ったら、いい店見つけたぜ！」

久「……………ふん」

カ「愛しい子。抱き締めさせてくれないのが、とても残念」

久「願い下げだ」

銀「はいはい！俺24時間受付中ですから！もうバシバシ来ちゃっていいから！」

カ「ふふ……………ああ、残念。もう時間みたい」

久「……………」

カ「私は、行かないと。また会える事を、切に祈っています」

銀「ちょ、帰る前にハグハグさせてー！」

カ「ポケた神の秘書も、結構辛かったりしますのです」

銀「最後なんかはっちゃけた！？」

久「……………」

銀「ぐおお、行っちゃった……………」

久「……………役目……………か」

静かな初夏

「おはよう、諸君。ホームルームを始める……久々津はどうした？」

「来てませんけど……」

久々津がIS学園に転入して、3日。

初日以降、彼が教室に来る事は無くなっていた。

学園の一角、木々の生い茂る森林地帯。

その中にある開けた空き地の中央、そこに置かれたひとつのベンチ。

まるで隠れ家のような、そんな背景の中で。

「……………」

久々津は1人、絵を描いていた。

ベンチに腰掛け、眼前のキャンバスに筆を走らせる。

彼が描いているのは、いわゆる抽象画と呼ばれる類のもので、それが何を顕わしているのかは定かでない。

意味を知るのは、彼自身のみだった。

「……………そろそろ仕上げか」

呟きながら、キャンバスに色を重ねる。

赤、青、黄、紫、白、黒、緑。

統一性の感じられない彩り。傍から見れば、絵とさえ呼べないような色の羅列。

それでも久々津にしてみれば、しっかりと意味のある配色らしい。時折筆を止め、少しばかり悩むように眉根を寄せていた。

「……………」

……何故彼が、授業にも出ずにこのような事をしているのか。

それは、言ってしまえば簡単な理由である。

久々津には、元々授業への出席義務が無いのだ。

世界で3番目の男性IS操縦者、久々津・オテサーネク。

しかし彼は、その過去があまりにも不透明であった。

戸籍さえ存在しない、何ひとつ身元を明らかにするものを持たない異分子。発見当初はテロリストの疑いさえ掛けられていた。

結局その疑いは杞憂だったのだが、IS学園を擁する日本政府にしてみれば、久々津の存在はいっ爆発するかも分からない爆弾のようなもの。

故に学園へ所属はさせてもISへの搭乗を不許可とし、純粋な生体データのサンプル——悪い言葉で言えば、『実験体』の役目を彼に与えた。

この事は、織斑千冬を始め一般教員には知らされていない。非道

な事であると、承知しているからである。

更に言えば、久々津には外出許可さえ無い。この学園の敷地から出る事も出来ないのだ。

授業の免除は、そのせめてもの代償であつた。

「ん……」

久々津としても、この扱いに不満があるかと問われれば、「ないと素直には言えない。」

けれどここ以外に行くあてがあつた訳でもなく、根なし草のままであれば男性IS適性者のデータを喉から手が出るほど欲しがっている研究施設等から、延々と逃げ続けなければならない。

それは御免だつた。

「……………」

絵具まみれのキャンバスに、横一線の青が入る。

……居たくてここに居る訳じゃない。

ここに居る事を余儀なくされたのだ。

真綿で首を絞められているようだ、久々津は口の端に冷たい笑みを浮かべる。

ぐちゃぐちゃの絵が、完成した。

「……………寝るか」

キャンバスをそのままに、ベンチの上で横になる。

瞼を閉じながら、ふと思った。

「何でこんなところに、ベンチなんか置いてあるんだ…………？」

ここは学園の敷地内でもかなり隅の方に位置している。

ついでに言えば、辺りには木が立ち並んでおり、外からこの場所が見える事は無い。

久々津のようにたまたま辿り着くか、この場所自体を知っていなければ、決して利用される事は無いだろう。

まるで、そう意図して作ったような場所だった。

「ふん…………まあいいか。日当たりは申し分ないし、何より静かで絵を描くには丁度いい。誰も使っていないのなら、俺が使えばいいだけ

のこと」

下らないと思考を切り、久々津はそつと瞼を閉じる。

そよ風に身を預けた彼が眠りに就くのに、そう時間は必要なかった。

久々津の眠るベンチの背凭れ。

その後ろ側には、隅の方に小さくこう刻まれていた。

『たてなしせんよう』、と。

自由奔放、お姫様

放課後の校舎内。

人気もまばらな廊下の中、積み重なった書類を抱えて運ぶ少女が居た。

「ふう……」

長い髪を三つ編みに結び、眼鏡をかけた姿。

如何にも真面目そうな雰囲気を漂わせている彼女の名は、布仏虚。

このIS学園生徒会の一員にして、とある家の『お手伝い』の役目を担っている。

「まったく、お嬢様にも困ったものだわ……すぐ遊びに行っちゃうんだから。仕事が溜まって泣くのは自分なのに」

書類の束が重いのか、やや覚束ない足取りで歩く虚。

どうでもいいが、名前の読みは『うつほ』である。断じて『ホロウ』では無い。

「本音は居ても仕事にならないし、人手は足りないし……はあ」

ひとつ嘆息した後、虚は重厚な開き戸の前で足を止めた。

『生徒会室』と書かれたその扉を、書類を抱えたまま器用に開ける。

「会長、追加の書類をお持ちしましたよ。今やってる分は終わり――」

室内に入り、そこに居る筈の人物に話しかけて――言い終える前に気付いた。

しんと静まり返った生徒会室、そこには誰も居ない事に。

「会長……お嬢様？」

会長卓には、先程『会長』であり『お嬢様』が泣きながら片付け

ていた書類が、積み上がったまま。

更にその傍らに、書類でないメモ用紙が1枚、ぼつんと置かれていた。

虚は書類を手近な机に乗せると、嫌な予感で震え始めた手を伸ばし、その紙きれを手取る。

『ごめんネ虚ちゃん、てへぺろっ』

「……………ッ」

小筆で書いたであろう達筆。

そのくせ可愛らしい文面なのが非常に腹立たしい。

最後の『』がどれだけ人の怒りを煽っているか、当の本人は理解しているのだろうか。

ぶるぶると、直前までとは明らかに異なる理由で震える虚。

すうと大きく息を吸い。

びりびりと紙きを破り捨て。

「ゴメンじゃねえよあんのガキイイイイイイイッ！！！！！！」

キャラクターを崩壊させ、咆哮した。

「あらららら……やっぱり怒っちゃったわね」

学園中に轟いたであろうその絶叫に些か目を丸くしつつ、音源の校舎を見上げる澄んだ水色の髪をした少女。

その名を更識楯無。このIS学園で『最強』の称号でもある『生徒会長』だ。

「でも私は謝らない！　だってあんな量の書類、絶対片付かないか

ら！そして生徒会室にも戻らない！怒った虚ちゃんが物凄く怖いから！」

ビシッ！と無駄にポーズを決め、かつこ悪い事を堂々と宣言する。
ちょうど通りすぎた下級生の目が、氷よりも冷たかった。

「……さ、逃げましょう。何時までもこんなところに居たら、見付かって殺されちゃうわ」

比喻でも何でもなく、今の虚に捕まれば彼女は殺されるだろう。

取り合えず怒りのほとぼりが冷めるまでは、何処かに身を隠すべきだと楯無は割と真剣に思った。

「部屋には戻れないわね、籠城に向かない構造だし。かと言って余りうるちよろしても、捕まらない保証は無し……」

悩むぐらいなら逃げ出さなければ良かったのだが、それ以上に書類が嫌だった。

やってもやっても沸いて出る。ゴキブリより性質が悪い。

命を賭けてでも、逃げる方がまだマシだったのだ。

あくまで楯無にとっては、だが。

「……うん、やっぱり『あそこ』かしら。虚ちゃんも知らないし、隠れるには——」

『どこだバ会長オオオオオオツ!!!!!!』

本でも投げたのか、生徒会室のガラスが割れた。

楯無の頬から、つうと一筋冷や汗が流れる。

「やっぱり、『てへぺろっ』は余計だったかしら……?」

逃げた事自体が原因と思われる。

少しばかりの乾いた笑みと共に、楯無は黄昏時の中へと消えて行くのだった……。

銀崎飛竜 専用機紹介（前書き）

銀「よう、何だかあんまり出番のない銀崎飛竜だ」

久「……………」

銀「相変わらず不愛想なムカデ野郎だぜ。で、美人秘書のカーテンさんは？」

久「……今回は居ないそうだ」

銀「えええええっ！？ そんな、こちとらあの人だけが楽しみでこんな前書きくんだりまで出張して来たつてのに……………」

久「どうでもいい。さっさと本題に入れ」

銀「神は死んだ……………ボケてるだけでまだ元気だけど」

銀崎飛竜 専用機紹介

名称：『きはがみ牙神』

世代：第3世代

系統：近・中距離タイプ、4脚型

製造元：シュライ・キサラギ社（日本）

操縦者：銀崎飛竜

スペック S F

火力 S

装甲 A

機動力 C

飛行速度 D

エネルギー効率 B

射程 B

操縦難易度 S

シールドエネルギー総量 900

『ISは人型である』という固定概念を捨て、獣の形状を模した最初の機体。紫のカラーリングが施された、狼のような外見をしている。現行ISの中で最も巨大、4メートル近い体躯を持つ。手動ではなくイメージ・インターフェースによる精神操作により動かしている為、その操縦難易度は極めて高い。又、大きさと形状からISの中では機動力にも欠けるが、その分より大型の武装を複数装備可能、4脚による射撃姿勢の安定などメリットも大きく、飛び抜けた火力を誇る。背面装甲から操縦者を露出させ、狙撃をする事も可能。

待機状態は紫のブレスレット。

武装

肩面装備 200mmレールガン×2

高周波振動クロー×4

頭部口腔内装備 12連装グレネードランチャー

尾型プラズマブレード

側面装備45mmガトリングガン片面6門×2

腹部装備5連装中型誘導ミサイル

緊急用衝撃波発生装置『エスケープ』

65口径スナイパーライフル『ノブナガ』

3連装ロケットランチャー『ユキムラ』

銀崎飛竜 専用機紹介（後書き）

銀「ま、見た目的にはMGS4のクライング・ウルフが使ってた奴みたいな感じだ」

久「馬鹿のような火力だな……それに殆どが装甲にくっついてる形か」

銀「滅茶苦茶強いぜ！ 小回り利かないし実弾装備ばっかだから、ラウラの停止結果とは相性最悪だけだな！」

久「IS自体がイメージ・インターフェイスにより操作される……こんなものがよく扱えたものだ」

銀「凄いつしょ！？ なんかIS適性がSじゃないとまともに動かせないらしいけど」

久「……むやみに性能だけを追求したバカが、後先考えずに弄ったんだろうよ」

銀「使い難いのなんのつて。火力すげえけど」

木々に彩られた邂逅

「……………」

怒り狂う幼馴染からの逃亡を図った楯無は、人目を気にしつつある場所に向かっていた。

そこは誰も知らない、彼女だけの秘密の場所。

去年の終わり頃にこっそりと作った、憩いの場であった。

楯無がこのIS学園の生徒会長に就任したのは、1年の中頃。

それは対暗部用暗部組織、『更識』の17代目当主である彼女にとつて、生徒会長に与えられる数々の権限がとても便利なものだったからだ。

元々快楽主義者の一面もあり、日々を楽しむ為にその権限をちよつとだけ悪用する事もあれど、基本的には『更識』として『生徒会長』として、その権力^{チカラ}を使う。

そんな特異な彼女には、気付けば『1人の時間』というものが無くなっていた。

……別段、孤独が好きな訳では無い。

けれどもどうしても1人で居たい時ぐらい、彼女にだってある。

寮は相部屋だし、どこに居ようと人目につく。

生徒会長とは、IS学園で『最強』の称号。それを欲して襲いかかつてる生徒も少なくない。

故に楯無は考えた。

ならば1人になれる場所を作ろうと。

学園の敷地内をくまなく探し、木々に囲まれた空き地を見付けた。そして夜中にこっそり備品のベンチをひとつ頂戴し、その場所に

運んだ。

以来そこは、楯無だけの場所になった。

疲れた時、眠い時、のんびりしたい時。

そして――泣きたい時。

『更識家当主』でも無く、『生徒会長』でも無く、『更識楯無』でも無く。

かつてあった本当の自分。幾重もの仮面に覆われ守られた、『
×』として。

自分が偽りない自分で居られる、唯一の場所となった。

「ふんふふん」

機嫌良く鼻歌を歌いながら、楯無は歩いて行く。

仮面を捨てられる、その場所へ。

歩く事、十数分。

林を抜け、開けた空き地へ出る。

「……………え？」

足を止め、見えたものに楯無は目を丸くした。

空き地の中央に置かれたベンチ。

そこには、居る筈の無い自分以外の人間が居たのだから。

「……………」

異様なまでに長い、どす黒い赤髪。

不健康そうな青白い肌、相反する黒の瞳。

右目の下には、特徴的な赤い蛇の刺青。

身長は一見やや低く見えるが、よく見れば組まれた脚が長い。座高が低いだけで、実際には175センチくらいあるだろう。

そんな特徴的な容姿をした、黒と白の逆転した学生服を着こんだ男子生徒が、ベンチに座って本を読んでいた。

「……………」

ふっと、彼の顔が上がる。

その暗い双眸が、ゆつくりと楯無に向けられた。

重ねた仮面の奥底に、自分を仕舞い込んだ少女。
人を遠ざけ、己を夜闇で包み隠した青年。

水の少女と赤い蚣の、最初の邂逅。

過去の片鱗

昼寝をした後、暇潰しに本を読んでいたら、人の気配を感じた。

顔を上げてみれば、ぼやけた視界の先に女が1人。

……さて、あの水色の髪。何処かで見た事があるような……？

「……………」

「……………」

向こうはこちらを凝視している。

何故ここに俺が居るのか、そんな類の視線だ。

大方こいつが此処の利用者、と言っかここを作った張本人か？

1人になりたい時には、この上ない立地だからな。

「……………」

しかし気になる、あの髪の色。

水色なんてそうそう居るものじゃないし、よく見れば眼も赤い。

……そして、丁度あれと同じ色合いをした女を、俺はたった1人だけ知っている。

「……………」

まあいい。今はそんな事はいい。

取り合えず目の前に居るこの女は、容姿こそ似ているが『あいつ』じゃ無い。

そして見たところ、カタギの人間でもなさそうだ。

立ち居振る舞いに、不自然過ぎるほど隙が無い。

……どうせ退屈してたし、試してみるか。

「……………っ！」

「クク」

ああ、ビンゴだ。

試しに懐へ手を伸ばしてみれば、一瞬だが構えを取ろうとした。

この女が平常時だったらこれくらい冷静に対応しただろうが、どうにも少しばかり戸惑っていたようで、簡単に引き出せた。

間違いない。こいつは裏の人間だ。

「まあ、こんな物騒な施設だ。裏の人間^{てめえ}みたいなのが居たところで驚きはしないがな」

「……なんのことかしら」

しらばっくれるか。当然だな。

だがその反応は、イエスって言ってるようなもんだぞ？

「貴方、転入生の久々津君よね？　ここを見付けたのは驚きだけど、こんなところで何してるの？」

「御明答、見付けたのはたまたま。何してるかなんて、見りゃわかるだろ？　読書だ」

「……………」

あからさまに警戒してるな。

さてどうするか。正直言葉を選んで話すのは疲れるんだが、それでいい誤解でもされたら面倒だ。

生身の戦闘じゃあ人間相手に負ける方が難しいが、だるい。

こいつ、それなりに出来そうだし。

「怖い怖い、何を警戒してるんだか。別に俺は何か企んでる訳でもお前をどうこうする気も無いんだぞ？ 蛭は確かに攻撃的だが、手を出さなければ噛まない」

「……………」

めんどくせえな、警戒解けよ。

「豆知識まで教えてやったのに。」

「最悪、だな。ただ読書に勤しんでただけだったのに、そう怪しまれるとか」

「貴方には不明な点が多すぎるのよ。名前さえ本名かどうか分から

ない人間を、信用できると思う?。」

「チツ」

……かつたるい。

そもそもこいつに根掘り葉掘り聞かれる筋合いも無ければ、それに答える義理も無い。

一瞬だけこの女にかつての『仲間』を幻視して、少しだけ相手になってやろうかなど考えたのがどうかしてた。

本当にどうかしてた。こいつを――

「^{アゲハ}揚羽と重なるなんてな……」

「……………え?」

「?」

……どうしたってんだ。

揚羽の名前を出したら、驚いたように目を見開きやがった。

「……………今……揚羽って……」

「……気安く俺の仲間の名を口にするな。それがどうした」

「なか、ま……？　あなた……貴方、お母さんを……知って……るの……？」

「……お母さん？」

何と。こいつは凄い偶然だ。

確かに揚羽は、俺達『5人』の中で唯一『外部』から連れられてきた人間だった。

これ位のガキが居るには、若過ぎる年齢だったが……おかしくは無い。

「……世界は狭いな」

「……教えて！　お母さんは今どこ？　どこに居るの！？」

「ふん……お断りだ」

誰がどこの馬の骨とも知れない輩……ああいや、揚羽のガキか。

だが揚羽の実子だってんなら、尚更に。

……教えてやる訳には、行かない。

「俺は、帰らせて貰う。……夕食の時間だ」

「待ちなさい！」

……………あ？

この女、誰に掴み掛かって来てんだ？

蛭は手を出せば噛み付くって、さっき言ったよな？

「きゃ、あつ！！」

「ツと……やべ」

不用意な事するから、思わず首に手刀を叩き込んだ。しまった。

咄嗟に加減はしたが……これはしばらく起きないだろう。

取り合えず、ベンチに寝かせておくか。

「……………チッ」

……………揚羽の、娘。

こいつが真実を知れば、どんな顔をするのやら。

知らない方がいい。

知れば……どうなるか分からない。

「最悪、だな……」

……またひとつ、厄介な事になった。

月光に染まる赤

「……………っ！」

……鈍痛を残す首を押さえながら、私は夜の闇を歩く。

目指す場所は、学生寮。

この網膜にその姿を焼き付けた『彼』と、今日もう1度会う為に。

「……………」

私の母、16代目『楯無』こと更識揚羽は、12年前の秋、任務中に行方不明になった。

更識家は、当然総力を挙げてお母さんを探した。

けれど手掛かりの欠片さえも掴めず、時間だけが無闇に過ぎた。

そんな折に突如現れた最強の兵器、インフィニット・ストラトス。

世界各国が荒れ、その水面下で更識家も大きく動いた。

……お母さんの搜索をしている暇なんか、無いくらいに。

「やっと……」

私は脇目も振らずに鍛錬に明け暮れた。

一刻も早く『楯無』を継いで、お母さんを探す為に。

大好きだったお母さんが、このまま居なくなってしまうのが嫌だったから。

妹の簪ちゃんなんか、お母さんの顔さえ満足に覚えていないのに！

「やっと見付けた、お母さんへの手掛かり……！」

お母さんを仲間と言った彼、久々津・オテサーネク。

彼が転入して来る際にそのデータを調べ、結局何ひとつ確かな事が分からなかった不透明な存在。

だけど今は、もうそんな事どうでもいい。

「逃がさない……絶対に」

厳しいところもあったけど、本当は誰よりも優しくて。

そして誰よりも強かったお母さん。

今もまだ、絶対にどこかで生きている。

……だから。

「……………」

彼がお母さんの事を知っているのなら！

例えどんな事をしてでも、居場所を聞き出してみせる！

「首を洗って、待ってなさい……！」

学生寮の屋上で、久々津は1人空を見上げていた。

黒天に浮かんでいる、零れ落ちて来そうなぐらい大きな満月。

それを見据えながら、持っていた炭酸飲料の缶をひと口、ぐいと呷る。

「……………」

彼の無機質な瞳は、いつもと違いどこか優しくて悲しげだった。

小さく吹いたそよ風が、乾いた髪をぱらぱらと散らす。

「…………揚羽。お前とは、良くこうして月を見たよな」

酒に弱いくせに月見酒と称して何杯も飲んで、倒れた拳句2日酔いで使い物にならなくなる。

そしてそれを『蛇』や『蜘蛛』に怒られつつも、懲りずに繰り返す。

……そんな馬鹿を、2人でしょっちゅうやった。

思えば『仲間』の中で出会ったのは1番最後だったが、絆は1番

深かった。

久々津にとって揚羽は、特別だった。

「お前の娘に会ったよ、揚羽……てかお前、ガキ居たのか。知らなかったぜ」

当然だけどな……と続け、更にひと口ジュースを啣る。

揚羽に娘が居た事は、久々津にとっても初耳。

否、恐らくは久々津の知る揚羽も、自身に娘が居たなど露とも思っていないかっただろう。

何せ彼らが出会った時、揚羽は記憶を失っていたのだから。

「お前の居場所は教えなかった……悪いな、感動の親子再会をさせてやれなくて」

ふつと久々津は月から目を逸らし、項垂れる様に下を向く。

その姿はまるで、懺悔をしている咎人のようだった。

「……なあ、揚羽——」

彼は言葉を最後まで紡ぐ事無く、後ろを振り返る。

開け放たれた屋上の扉。

そして久々津を射抜くような視線で見据^めえる、水色の髪の少女。

「よう、早かったじゃねえか」

更識楯無が、そこに居た。

造られた『最強』

「お前が何をしに来たかは、大体分かってる。そしてそれを踏まえた上で言おう、諦める気は無いのか？」

月光に照らされる中投げ掛けた、呟きのような久々津の問い掛け。

それに対する楯無の答えは――

「あり得ないわ。力尽くでも、貴方からお母さんの情報を吐かせる」

「……当然、か」

やれやれとかぶりを振るその姿は、とてもではないが気乗りしている様には見えず。

けれど次の瞬間、無機質な瞳で彼女を睨み付けた。

「いいだろう。1番分かり易い方法でけりをつけてやる」

拳を前に突き出し、久々津は言葉が続けた。

「何をしてもいい。俺に膝をつかせれば、揚羽のことをすべて教えてやる」

「……………それだけ？」

「……………もっとレベルを落として欲しいのか？」

どこか投げ遣りな彼の態度に、楯無はほんの少し眉根を寄せる。

「……………そう言えば、自己紹介が遅れたわね。私は更識楯無、このI S学園で最強を意味する『生徒会長』よ」

「ふうん……………で？　これ以上のハンデは要るのか要らないのかどっちだ」

「っ……………後悔しても知らないわよ！」

刹那、と言うべきであろうか。

5メートル程あった間合いをすり足で詰め、一気に楯無が久々津

の眼前に現れる。

古武術の奥義、『無拍子』と呼ばれる移動法……とてもではないが、10代の子供に修められる技術では無い。

そして反応出来ていないのか、久々津はその場から動かない。

貰った。楯無はそう確信し、彼の肺に向けて双掌打を打ち込んだ。

だが――

「なあ、どっちだ。要らないのか？」

「なっ……！？」

確かに手応えがあった。

けれど久々津は息を詰まらせるところか、平然とその場に立っていたのだ。

楯無は一瞬だけ驚きで目を見開くも、今度は鳩尾に蹴りを突き刺す。

ずがんと響く音。

常人が喰らえば、呼吸停止どころか肋骨が数本粉碎するようない撃だった。

「……無しでいいんだな？」

「うそ……」

手応えは十分あった。防がれた様子もない。

けれど、久々津はまるで何事も無かったかのように、こきこきと首を鳴らしていた。

「どうして……どうして効いてないの……！？」

「？ 簡単な話だ。単にお前の拳や蹴りよりも俺の身体の方が堅いだけだ」

滅茶苦茶な理屈だが、現に効いていない事を見れば嫌でも認めざるを得ない。

打撃蹴撃は効かないと悟ると、楯無は彼の袖を掴んだ。

——それなら、投げてしまえばいい！

「非力だな……お前」

「きゃあっ！？」

投げ飛ばそうと力を込めた瞬間、楯無は逆に投げられていた。

それでもくるりと空中で体勢を立て直し、着地する。

久々津はと言えば……欠伸の最中だった。

「くっ……！」

齒噛みする楯無。

けれど焦燥を振り払い、冷静に分析を始める。

「（あり得ない……急所への攻撃がまるで効かない事も、あんな細腕で私を軽々と投げ飛ばす事も……そんな事、人間の膂力で出来る訳……っ！？）」

思い至るひとつの結論。

彼女は油断なく構えつつ、久々津に問い掛けた。

「まさか貴方……アドヴァンスド遺伝子強化素体！？」

「……半分正解だな、正確には遺伝子強化をされた改造人間だ。ワイルドカスタム身体の8割以上は強化繊維と炭素フレーム、それと自己修復ナノマシン

ンで構成されている」

説明しつつ、彼は屋上の手摺りを掴む。

金属製のそれが、ひしゃげて折れた。

「さて……見ての通り化け物なんだな。うっかり加減を間違えて殺しかねない。それでもまだやるか？」

「っ……当然よ！ 化け物だろうと怪物だろうと、私は絶対に諦めない！ やっと見付けた手掛かりなんだから！」

「……………やれやれだ」

様々な武術の技を織り交ぜ、向かってくる楯無。

それらを圧倒的な膂力でいなし、抑え、撥ね退けながら。

久々津は思う。

「（慕われてるな、揚羽……お前の真実を教えない事は、俺の我儘なのか……？）」

2人の攻防は、月が真上に昇るまで続いた……。

小さな心変わり

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「……………」

コンクリートの地面に仰向けで倒れ、楯無は息も絶え絶えとなっていた。

そしてその姿を見下ろす久々津は、特に疲労した様子さえ無く。

ただひとつだけ、深いため息を吐いた。

「3時間。俺を相手によく粘った。正直途中何度か殺しそうになったが、ただの人間にしては大したもんだ。素直に感服したよ」

「はあ……はあ……」

答える事も出来ないのか、彼女はただ久々津を見上げるのみだっ

た。

けれどその眼光は未だ闘気を失っておらず、身体さえ動けば再び向かってくるだろう。

……ここまでやられて折れないか。

強い……寧ろ強情だな。

見れば、腕が弱々しくも動いている。

立ち上がるつもりなのか。まだ。

「もうよせ。既に全身疲労で動く事もままならないだろ？　これ以上無茶すれば、本当に死ぬぞ」

久々津はある程度加減した、ゆえに楯無には目立った外傷が殆ど無い。

しかしトップギアで動き続けた反動だろう、最早身体自体が限界なのだ。

ここから先は、命に拘わる。

「……ま……だ……よ……」

それでも楯無は立ち上がろうとする。

その狂気染みた行いに、久々津は再三ため息を吐いた。

「無理だつてのが分からないか？ 意地でどうこうなる問題じゃない。諦めろよ」

「……………や」

よろめきながら、ゆっくりと。

それでも確かに立ち上がり、彼を睨み付ける楯無。

何故この状況でそんな目が出るのか……………けれど。

久々津はそんな彼女に、揚羽を……………そして嘗ての自分を、知らず重ね合わせていた。

「……………」

今のあいつは、昔の俺だ。

揚羽と最初にやりあった時、例え何度打ち据えられても、どれだけ圧倒的な力の差を見せ付けられても、決して退こうとしなかった嘗ての俺だ。

『蜘蛛』に『蛇』、『蠍』の3人を自分だけで守っていた時の俺だ。

あれは絶対に退かない。

まだ守るべきものがあつた時の俺が、そうだったように。

抱いている思いは違っても、きっと決意は同じだ。

だからあいつは退かない。例え死んでも。

あいつと同じ目をしていた時の俺が、そうだったように。

「……………やれやれ」

最悪、だな。

俺はどうやら、この女を少しばかり見くびっていたようだ。

揚羽の事は、別に教えて困る事じゃない。

教えなかったのは俺の我儘。ただのエゴだ。

……彼女はきっと、俺の知る残酷な真実に耐えられるだろう。

そう思った。

思ったからこそ、俺は――

「ほらよ」

自ら地面に、膝をついた。

「……………え……………?」

当然楯無は、驚きで目を丸くした。

彼女を見据え、久々津はほんの少し口の端を上げる。

「条件は俺に片膝をつかせる、だった。けれど俺は自分から膝をついた。つまり引き分け、ノーゲームだ」

「……………?」

「訳が分からないって顔してるな。要するに、またチャンスをやると言ってるんだ」

意地と気迫だけで立ち上がった楯無だったが、正直もう彼に膝をつかせるどころか、まともな一撃を入れる事さえ絶望的だと理解していた。

そんな彼女にこの場を退かせ、尚且つ自分の我儘を少しだけ叶え

る為の手。

それが『再戦』だった。

「身体治したらまたかかって来い。俺は大概お前と最初に会った場所にいる、何時でも相手をしてやる」

「……………」

「1度でもお前が俺に膝をつかせられれば、揚羽の事を教えてやるよ」

だから今は退けと続け、彼女の返答を待つ。

……………ここで退き際を見極められないようなら、適当に気絶させて今後一切相手にしないつもりだった。

楯無は数秒の葛藤をしていた様子だったが――

「……………わかつ……………た……………わ……………」

その案を肯定し、直後倒れ込んだ。

地面と接触する前に、久々津は楯無をそつと受け止める。

「……………すう」

「眠ったか。無理無いな」

そのまま彼女を抱え、久々津は屋上を後にした。

……彼が小さく、本当に僅かだが笑っていた事を知る者は——誰も居ない。

「……………と……で、こいつの部屋は何処だ」

小さな心変わり（後書き）

楯無がミステリアス・レイディを使わなかった理由。

別に意地とかでも何でも無く、実際１度起動させようとしたがその時の隙を突かれて痛手を負わされ、単に起動させられなかっただけ。

ちなみに久々津と楯無の戦力差は

生身 久々津>>楯無

IS 楯無>>>>>>久々津

役得と決意

やあ皆。三千世界が認めるオリ主、銀崎飛竜だ。

……発言が図々しいとか、誰だっけお前とかお願いだから言わないで。

どうせ俺はヒロインの1人にフラグも立てられないような、能力的に駄目な方のオリ主ですよ。ポジション的には精々、主人公の横で騒いでる3枚目な友達キャラですよーだ。

いやもう、実際現在進行形でそんな感じなのが辛い……。

「だがしかあし！ そんな俺にも、漸く報われる時が来たんだぜ！」

「黙れ、喧しい」

「……ごめんなさい」

ベッドに寝っ転がってるムカデ野郎こと久々津に怒られた。

……うん、実はこいつと同じ部屋なんだ俺。そうだった当初は、もうマジで世界を呪ったね。

ボケた神様に散々文句言っただよ……聞こえてたか知らないけど。

とにかく俺の幸運値が、低下の一途を辿っているのは間違いなかった。だってルームメイトがムカデ野郎なんだもん。

けれど……けれど！

「久々津、俺はお前に今凄く感謝してる。ありがとう」

「……………くー」

「寝てるし！俺の感謝は無意味！？」

……まあいい、寝てくれた方が助かるぜ。

俺はゆっくりと深呼吸しながら、自分に宛がわれたベッドに視線を向けた。

「すう……すう……」

そこでは、あの『生徒会長』更識楯無が穏やかな寝息を立てているのだ！

いやあ……久々津が何故かボロボロのこの人を抱えて連れて来た時は本当にビビった。

そして「こいつの部屋が分からん、お前のベッドで寝かせとけ」とか言つて、俺の返事を聞こうともせず彼女をベッドに寝かせたあの男には、もう敬意どころか信仰心が湧いたね！

ここが東方の世界だったら、今頃久々津は神力に目覚めて神の1柱として祀り上げられてた事だろうよ、俺限定で。

だってあの楯無会長が、まるで子供みたいなあどけない寝顔を見せてるんだぞ！

可愛い……超可愛い！

何で久々津が彼女を連れて来たのかとか、どうしてボロボロなのかとか気になるっちゃ気になるけど、この寝顔見てたらもう思いきりどうでもよくなったわ！

「んう……むにゃ……」

「……うっ……ぐすっ……」

やべ、嬉しさと感動のあまり涙が。

神様仏様久々津様、本当にありがとうございます。

特に久々津……もうお前には足を向けて寝ねえよ。

「つうかこれ、添い寝か？ 添い寝していいのか？」

だって楯無会長、俺のベッドで寝てるし。

他に寝れるところ無いし、もう不可抗力だよなこれ。

友達関係なら簡単だろうけど、男女の関係に持つてくには恐らく今のところ作中で1番難易度の高いこの人と添い寝していいんだよな！？

……楽園は……ここにあったぜ。

「久々津様マジ感謝感激雨あられ。折角頂いたチャンスだ、ここで行かないや男が廃る」

据え膳食わぬは男の恥、もし楯無会長が起きて騒ぎになったとしても、そしたら全部久々津の所為だ。神様呼ばわりしといてあれだけど。

まあ織斑先生辺りには拳骨食らわされるかも知れんけど、それでこの一夜の幸せが手に入るなら安い安い！

では、いざ参る。

「失礼しまゝっす」

「……くう……くう……」

「うおお……近くで見ると破壊力抜群だこれ。零落白夜なんてメジやねえぜ」

頭の中で、「いや比べるなよ」と一夏の声が聞こえた気もするけど、多分気の所為だ。

……うん、天使どころか女神の寝顔だぜこれは。BDバージョンでしっかりと脳内保存しておかねば。

「ううう……幸せだ……」

楯無会長は、前世で見たアニメや小説の中でもかなり好きなキャラクターだった。

だがこの人もいずれは一夏に惚れるのかと思うと、何だか悲しい。そうならない為には、俺自身がこの人にフラグを立てるしかないのだが……。

「セシリアもシャルロットもラウラも、悉く失敗したし……」

まだチャンスが無い訳じゃないけど、俺はお世辞にも彼女等に好かれてないし。

フラグメーカー朴念仁、一夏の実力を甘く見てたのが悪かった。

それに皆からすれば、俺は一夏と2人きりになるのを邪魔する障害物みたいなもんだしなあ。

「……………ん？」

いや待て待て。考えてもみる。

原作では楯無会長は、ファントム・タスク亡国機業から一夏を護衛する為に、一時期同室になってた。

まあ実際は、もっと前から一夏の周囲には気を配っていたと思うけど。

何せあいつは第2回モンド・グロッソが開催された時に、1度攫われてるんだ。念には念を入れてあったと思う。織斑先生ブラコンだし。

だが。まだ楯無会長と一夏は、直接会った事が無い。

流石に会った事も無い相手にフラグを立てるなんて、さしもの一夏であろうと無理だ。…………たぶん。

つまり、つまりだ。この時点で楯無会長と知り合って置けば、俺は一夏より有利な立場でフラグ立てが出来る！

この人の立場上、積極的にこちらから接触すればかえって怪しまれそうだったから動けなかったが……まさかこんな形で突破口を見い出せるとは！

久々津には本当に感謝だな、これは！

「俄然やる気が湧いて来たぜ……俺はやる！」

小さく決意の声を上げる俺。

そしてその決意を胸に、そのまま俺は眠りに就く。

うん。今日は、いい夢が見られそうだ……。

ペペペペ、ペペペペ

「……ん、んう」

「……………あ。私、寝ちゃってたんだ……………」

「ここは……………寮の部屋？」

「私の部屋じゃない……………もしかして久々津君の——」

「……………ふああ……………あ、どーも」

「……………えつと……………誰かしら？」

ちなみに久々津はシャワー中だった。

役得と決意（後書き）

楯無の扱いをどうするか検討中……。

久々津のヒロイン？ 飛竜のヒロイン？

意見があれば、お待ちしております。

蚣と水精、空飛ぶ竜

「はあああッ！！」

楯無はゆらゆらと緩急をつけた動きで、見事久々津の背後を取った。

そしてその後頭部に、手加減ならぬ脚加減無しの高キックを叩き込む！

「ッ」

それにより、ほんの少し。ほんの少しだが、久々津の体勢が崩れた。

これを好機とばかりに、楯無は追撃を図るが――

「……そいつは悪手だな」

「きゃんッ!？」

それよりも早く、久々津が彼女の額を指で弾く。

いわゆるデコピン……だが、化け物染みた彼のそれはまるでハンマーのような威力であり、楯無は脳が揺さぶられる様な衝撃に襲われた。

脳震盪には至らなかった様だが、数歩たたらを踏む。

そんな、決定的な隙を見せた。

「飛べ。空高く」

「きゃああああああああッ!!!」

久々津は楯無の襟首を掴み、そのまま垂直に上へと放り投げた。

4、5メートルは飛んだだろうか。頭へのダメージで受け身を取る事もISを起動させる事も出来ず、彼女は悲鳴を上げながら地面に落下する。

そして、パニックに陥ったまま頭から衝突してしまわんとした寸前に。

「……お帰り」

久々津に今度は足首を掴まれ、事無きを得るのだった。

「ううつ……」

半ば放心状態の楯無。目が漫画のようにぐるぐると回っている。

それでもスカートを押さえている辺りは、流石と言つべきなのであろつか……？

……とにかく、またしても彼女の敗北であつた。

既にあの屋上での戦い……否。戦いとさえ呼べなかった、一方的な蹂躪から数日。

全身疲労からの全身筋肉痛のコンボでまともに動く事も出来なかった翌日を除き、連日久々津へと挑む楯無だったが……。

「今日でお前の5連敗だな」

「うぐっ」

聞いての通り、結果は惨憺たるものだった。

打撃も関節技も投げ技も効かない。素手では到底敵わないと見て木刀や薙刀を持ち出し、昨日などは弓矢まで使った。

けれど、どれも惨敗。

改造人間特有の異常なタフネス。この5回の戦闘で、楯無は未だ彼に有効な1撃すら入れた事が無い。

殴った拳の方が痛むなど、どんなふざけた身体だ。

「……まだ頭が少し揺れてるわ……ただのデコピンでここまでされるなんて、おねーさん驚きよ……」

「それは貴重な体験をしたな。人生何事も経験だぞ」

「誰の所為よ誰の！」

すつとぼけた事をのたまう久々津に、額がくっ付きそうな勢いで迫る楯無。

彼は相変わらず何を考えているか分からない無機質な瞳で、じつと楯無を見ていたが。

「……その、なんだ。顔が近い、照れる」

そう言っ て頬を軽く染め、ふいっ と視線を逸らした。

表情や感情に欠ける節のある久々津のそんな行為に、楯無も少し慌てる。

「え？ あ、ご、ごめんなさい……」

「まあ嘘だが」

刹那、頬の赤みなど何処に行ったのか、けろりと一瞬前の無表情に戻る久々津。

……嵌められた！

普段は専ら嵌める側である彼女は、こうも簡単にからかわれた事に対して言いようの無い敗北感に襲われる。

舌戦でも肉弾戦でも、彼の方が数枚上手らしい。

「……あの楯無会長が手玉に……て言うか久々津、お前ってそんな

キャラだったのか」

「概ね。初対面の人間に対して辛辣な態度を取るの、人間社会での常識だろうが。非常識だなお前……えっと……十島？」

「銀崎だよ！　なんだよそのあり得ない間違え方は！？　つつかどんな常識だよ！！　何処の異星人の常識だよ！！」

久々津の横に座り、喚いている銀崎。

そう。何故かこの3人で食堂の一角に陣取り、昼食を共にしているのだ。

「しかしまあ……どうしてお前と会長がバトツてるんだよ。しかも会長全敗って……久々津何者だよって話だぜ」

「馴れ馴れしく話し掛けるな屑が。お前を連れて来たのは、単にこいつの相手をさせる為だ。俺とじゃなくこの女と話せ」

「辛辣なのは何ひとつ変わってねえし！　俺は引き摺られてきた被害者なのに！！」

更に喚き出した銀崎。けど内心では、楯無と共に食事ができて狂喜乱舞している。

……要するに、負けた後も自分についてくる楯無を鬱陶しく思い、適当な奴に相手をさせようと思った久々津が一夏達と一緒に居た銀

崎を偶々見付け、有無を言わず引き摺って来たのだ。

その際に一夏が「俺も一緒にいいか？」と尋ねて、乙女達に理不尽な制裁を受けたのは余談である。

「くすくすん……久々津君が冷たくて、おねーさん泣いちゃう」

「元気出して下さい楯無会長！ 話し相手なら俺が！」

「あらありがとう……えっと……木村君？」

「銀崎です。下の名前は飛竜です」

久々津が手玉に取れないので、仕方なく銀崎をからかい始めた楯無。

……それが彼の狙いであり、寧ろまたしても手玉に取られているのは気付かないふりである。

「うん、飛竜君ね……イヤンクツク？」

「せめてリオレウスでお願いします……！」

「分かったわ、イヤンクツ君」

「分かってないし!？」

からかいやすい相手にシフトして、調子を取り戻したらしい楯無。
パツと広げた扇子には、『復活』と書かれていた。

蚣と水精、空飛ぶ竜（後書き）

未だ、楯無の扱いを検討中。

久々津か……飛竜か。

ご意見お待ちしております。

面影

久々津は少々苛立っていた。

……原因は、今も自分の目の前に座り、にこにこ笑顔を振りまいている少女。

そう、更識楯無の所為である。

「ねえ久々津君。貴方っていつもロールパンとサラダしか食べてないけど、それだけで足りてるの？ 良かったらおねーさんの唐揚げ分けてあげる、はいあーん」

「要らん」

「はいはいはい！ 俺！ 俺欲しいです！」

……ついでに、横で騒いでいる飛竜バカも含む。

「（チツ……変に懷かれちまったもんだ）」

連日手合わせを挑んで来るのはいい。

言い出したのは自分からだし、何よりこれは自分の我儘を叶える為の事。

……だが、それが終わった後もこうして纏わり付かれるのは別の話だ。

久々津は元々静寂を好む。喧騒を嫌い、 unnecessary 会話を嫌う。

そして何より……人との深い関わりを忌避している。

「（けどどうにも揚羽の面影をチラつかせるこいつに、強く言えねえし……どうしたもんか）」

せめて幸いなのは、似ていると言っても親子似の容姿な事か。

揚羽はもつと憂いのある顔立ちで、どちらかと言えば気弱そうな雰囲気漂わせる女性だった。

それに楯無と違い、決して口数も多い方では無く。

つまり一緒に居ても、煩くなかったのだ。

「（いつその事このバカ……ええと、中山？とにかくこいつ辺りとくっ付いてくれれば楽なんだが）」

ちなみに銀崎である。

どうにか仲良くなろうと、必死に楯無と話している姿は久々津としても見ていて少しだけ面白かったが、出来ればもっと遠くでやって欲しかった。

人の喚き声ほど喧しいものは無い。

「……んぐ」

気を紛らわそうと、ロールパンを齧る。

そんな彼の姿に、ふと楯無が首を傾げた。

「あら？ 久々津君、ロールパン真ん中から食べるの？ お母さんと同じなのね」

「……そもそも揚羽に食い方を教わった」

何故か彼女は、ロールパンを真ん中から食べる事に異様に拘っていた。

ハンバーガーを齧るのにも苦勞する様な久々津の小さな口では、正直食べ辛いやり方だが……もう習慣である。

「ふうん……お母さんと仲、良かったんだ」

「数少ない仲間だったからな」

「ねえ、お母さんとは何時会ったの？」

「……教えるか、バカが」

「むう」

こうして隙あらば聞き出そうとしてくるのだから、抜け目ない。

「何時か絶対聞き出すんだから」

「……なら当然無理だな」

「くすんくすん……久々津君がいじめる……」

「ゴルア久々津っ！　なに楯無会長泣かしとんじゃおんどりやあつ
！！」

彼女の嘔泣きに反応し、久々津へと飛びかかった飛竜。

1秒後、彼はテーブルに顔をめりこませていた。

「ん、ごちそうさま。……そう言えば久々津君、来週だったかしら？」

食事を食べ終えた楯無からの、唐突な問い。

「何がだ」

「何って、臨海学校よ。来週からでしょ？」

「……………臨海、学校？」

「……………」。

「知らん、今初めて聞いた。それにどうせサボる」

「勿体ないわよ？ 折角外に出られるチャンスじゃない」

「海になんぞ行っても仕方ない」

確かに、外出許可の無い久々津にしてみればそうは無い機会だろう。

しかしながら、彼の反応は今ひとつだった。

「俺には授業への出席義務も、行事への参加義務も無い。単なるモルモットとしてここに来たんだからな、必要無い」

「それは……」

久々津の言葉に、少なからず彼の内情を知っているであろう楯無は口籠る。

「……いちいち気にするな、うざったい」

「……ええ」

気にしてない、ようには見えない。

生徒会長としては、一生徒の不遇に思うところがあるのだろう。

……そんな、僅かに目を伏せた彼女の姿は、母親のそれによく似ていた。

「……………チッ」

面倒そうに舌打ちした後、久々津は席を立つ。

どうにも……あの顔には弱い。

「……………考えておいてやる」

「え……………」

「フン、じゃあな……………それと、手合わせ以外で余り絡んで来るなよ」

言った事に対し、楯無が何かを返す暇も無く。

久々津は、足早に食堂を去ってしまった。

「……………あ、あ！　ね、ちょっと待ってよ久々津君！」

突然の行動にしばし放心するも、久々津の後を追いかける楯無。

……………楯無が追いついた時、彼がとても迷惑そうな顔をしていたの

は、言うまでも無い。

「……う、痛てて……」

飛竜が目覚めた時、周囲にはもう誰も居なかった。

「オチ担当かよ！？ チクショー、グレてやるーっ！！」

面影（後書き）

楯無ヒロイン化アンケート途中経過

久々津のヒロインに 5 票

飛竜のヒロインに 0 票

臨海学校終了後、決定します。

このまま久々津のぶっちぎりか、飛竜が巻き返すか。

ご意見、お待ちしております。

蛭は眠る（前書き）

楯無ヒロイン化意見まだまだ募集中。

どうぞよろしくお願いします。

蛇は眠る

「……くー……くー……」

制服のままベッドに寝転がり、寝息を立てている久々津。
変わり無いいつもの光景。

けれど、いつもとは決定的に違うところがあった。

「久々津君……久々津君っ、起きて下さいいっ！」

涙目になりながら、必死で彼を揺り起そうとしている女性。

久々津の所属する1年1組の副担任、山田麻耶。

彼女が何故、ここに居るのかと言えば……

「起きて下さい久々津君！ もう晩御飯の時間ですよー！」

早い話がそうなのである。

ついでに言えば、部屋もいつもの寮では無く。

IS学園臨海学校の宿泊地である、『花月荘』の1室であった。

「……くー」

「ううう……起きてくれません……」

最早半泣きで呟く麻耶。

対して久々津は、起きる気配さえ無い。

……楯無に「考える」と言った通り、彼は臨海学校には参加した。

行きのバスでも始終テンションが低く、これを機に仲良くなろうとも思ったのか頻りに話し掛けて来た一夏への対応も、かなり辛辣だった。

『話し掛けるな屑』

『黙れ、縊るぞ』

大体こんな調子で、流石の一夏も頬を引き攣らせていた。

寧ろ彼に好意を寄せている少女達の方が怒りを露わにしていたが、久々津はそんなもの羽虫程度にしか思っていない。

旅館に着いた後も、自由時間中に泳ぐどころか早々部屋で眠ってしまい、夕食の時間になっても姿を見せない彼を心配した麻耶が訪ねて来て、今に至るのである。

「……………」

ちなみに久々津は個室だ。

一夏と飛竜は夜中に女子が押し掛けて来かねないとの事で、2人とも担任である千冬と一緒に部屋になっているが、転入時にクラス全体に辛辣な言葉を吐き、以降は姿さえ碌に見せない彼を訪ねる生徒は皆無だろうと教師間で結論が出され、そうなっている。

麻耶は暫くの間、久々津を何とか起そうと揺すっていたが、終ぞ目覚めず。

「うう……………久々津君の分は取っておいて貰いましょう……………ぐすっ」

結局泣きながら、彼の部屋を後にするのだった。

夜も更け、食事と入浴を済ませた生徒達が各々の部屋で談笑に興じている頃。

「……………ん」

ずっとその双眸を開き、久々津は目を覚ました。

「……………」

音も無く、手を使わずに身体のパネだけで起き上がる。

今の今まで寝ていたとは思えない、敏捷な動きであった。

「9時前か……………」

暗い部屋の壁に掛けられた時計を一瞥し、首を鳴らす久々津。

昼から食事を摂っていないが、ずっと寝ていた為か特に空腹は感じない。

やや固まっていた身体をしならせ、ほぐす。

「……………」

どうするか。

眠気を残していないクリアな思考で、久々津は考えを巡らせる。

これ以上は暫く眠れそうにも無い。食事も別に要らない。

かと言ってここに居ても退屈を持て余すだけ。

絵の道具も持ってきてない。どう時間を潰すか……。

「……………海でも、見に行くか」

夜の海は嫌いじゃない。

結論を出し、久々津は部屋を出た。

「出入り口は……確かこつちだったな」

静かな動作で廊下を歩く久々津。

誰かに見付かっても困る事はないが、面倒ではあると思っていた。
故に余り人目につかぬよう、少しだけ注意して歩く。

……そうしていると、角を曲がったところで。

「……………?」

奇妙なものを見付けた。

「「……………」」

「何だあれ……………」

3人の女子生徒が、部屋の扉に耳をくっ付けて息を潜めていたのだ。

何故か通夜の最中の様な、暗い表情で。

「……………」

多分関わると面倒だ。さっさと行こう。

そう思い、未だこちらに気付いていない彼女等の後ろを、足音を立てず速やかに通り過ぎ――

バンッ！！

「「「へぶっ！？」「」」

ようとしたところで、突然ドアが勢いよく開けられ、ぴったりと耳を寄せていた3人がそれに殴られた。

一様に悲鳴を上げ、衝撃に倒れる女子達。

そして。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

部屋の中から、呆れたような顔をした千冬が現れた。

「は、はは……」

「こんばんは、織斑先生……」

「そしてさようならっ!!」

聞き耳を立てていたのがバレた事により、脱兎の如く逃げ出す人。

だがその内2人は襟首を掴まれ、残る1人は浴衣の裾を踏まれ、すぐに捕まった。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「ええっ!?!」」」

「（……体術は揚羽の娘より若干上、ぐらいか……やるな）」

それを見ていた久々津は、千冬の生身での実力にやや関心を見せた後、俺には関係無いとばかりに立ち去ろうとするが――

「おい久々津、何処へ行く。お前もだ」

「……あ?」

「「「え?」」」

彼に向けてちよいちよいと手招きする千冬。

何で俺が、関係無いだろと言いたげな顔を向ける久々津。

そして今になって漸く久々津の存在に気付いたのか、素っ頓狂な声を出す3人。

「ああ、そうだ。ついでだから、他の2人——ボーデヴィッヒとデユノアも呼んでこい」

夜の海を見に行けそうには、無かった。

宵闇

「なあ……お前ら、一夏^{あいつ}のどこがいいんだ、ん？ 言ってみろ」

ビールをゴクゴクと呷りながら、眼前で横並びに座っている女子達……右から篠ノ之箒、凰鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒの5人に向け、そう尋ねる千冬。

彼女の両脇には、何処かげんなりした茶髪に赤眼の男と、無表情な赤髪黒眼の男。

銀崎飛竜と久々津・オテサーネクが、それぞれ腰掛けていた。

「……………」

一見無表情な久々津だったが、内心では大分苛立っている。

訳も分らず部屋に引き摺り込まれた拳句、いわゆる『ガールズトーク』に巻き込まれたのだ。

彼の眉間にほんの少し皺が寄っている事には、誰も気付いていない。

……何でこんな場に呼ばれたんだ？

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「……織斑先生は『あいつ』としか言っていないのに、真っ先に一夏の事が思い浮かぶ時点で黒だよ箒ちゃん……」

「なっ！？ う、煩いぞ銀崎！ 箒ちゃん言うな……！」

手にしたラムネを傾けながらの箒の言葉に、力無く意見した飛竜が怒鳴られる。

けれど実際その通りなので、怒鳴り方にもやや覇気が無い。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

ぶいと顔を背けながら言う鈴。

……事情を殆ど知らない久々津だったが、取り合えず目の前の5

人が自分にバスの中で散々話し掛けて来たうざい男……世界で最初の男性IS操縦者、織斑一夏に対して好意を抱いている事はすぐに分かった。

と言うか、こんなあからさまな態度で分からない方がどうかしている。

だが……話を聞くに、当事者である織斑一夏は彼女らの気持ちにまるで気付いていないらしい。

病院に行った方がいいんじゃないかと、率直に思った。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりして欲しいだけです」

これまた分かりやすい態度で、ツンと言い放つセシリア。

久々津は心底馬鹿らしく思ったのか、内心で嘆息する。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「「「言わなくていいです!」「」」」

千冬の言葉に態度を一変させ、一斉に詰め寄る3人。

もしこれを伝えられでもしたら、あの世界屈指の唐変朴の事だ。絶対言葉通りに受け取るに決まっている。

ただでさえ上手く行っていないのに、これ以上話をややこしくしたくない。

それが、彼女等の共通見解だった。

「僕——あの、私は……やさしいところ、です……」

そんな中でぽつりと、しかし真摯な声音でそう言ったのは、シャルロットだった。

「あいつは誰にでも優しいぞ」

「そうですね……そこがちょっと、悔しいかなあ」

あははと照れ笑いする。

千冬は最後に、今までひと言も発していないラウラへと視線を向けた。

「で、お前は？」

「……っ、強いところが、でしょうか……」

びっくりと身をすくませながらも、そう彼女は言葉を紡ぐ。

「いや弱いだろ」

けれど千冬は、にべもなくそう返した。

それに対し、ラウラが食ってかかる。

「つ、強いです。少なくとも、私よりは」

「ふむ……まあ強いかはともかくとして、あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々だし、マッサージだってうまい」

確かに一夏は、つい先程も千冬とセシリアにマッサージをしていた。

ラッキースケベな技能持ちやがってと飛竜は声に出さず憤慨し、久々津は苛立ちを通り越して退屈になって来たのか、顔を背けて欠伸する。

「と言う訳で、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

千冬の言葉に、5人全員が反応した。

「「「「く、くれるんですか!?!?!」」」」

「やるかバカ」

くくくと笑う千冬。

そのまま2本目のビールを開け、口にした。

「女なら、奪うぐらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

そう、実に楽しそうに言う。

久々津はいつ話が終わるのかと、若干待ちくたびれていた。

そんな彼と、すっかり蚊帳の外で落ち込んでいた飛竜に……

「それで、お前等はどうなんだ? 気になる女の1人でも居ないのか、IS学園（いす）なら選り取り見取りだろう」

話題を振られ、軽く舌打ちする久々津。

飛竜の方は対照的に、漸く相手にして貰えて嬉しそうに勢いよく立ち上がる。

少女達も、貴重な異性の意見に耳を傾けた。

「今は楯無会長LOVEッス！ あの人マジ女神ッス！」

「……ふ、更識か。これはまた難儀な相手だな。手強いぞ、あれは」

「そっすね、いつもはぐらかされてメアドも聞き出せてないッス」

「……………」

ちなみに久々津は楯無のアドレスを持っている。

持っていると言うか、何時の間にか携帯に入っていた。

「ああでも、飄々としてるあの人も女神……………」

「……さっさとくっ付け馬鹿が……………いつそ襲え」

「んな事したらラスティ―・ネイルで細切れにされっからね！？
早々どうにかなる相手じゃないんだよあの人は！！」

「……………役立たずが……………いつそ織斑もっしーん一夏に押し付けた方が手早く
済みそう——」

「ダメええええええッ！！ あの天然フラグメーカー全人類の半
分の敵に会わせちゃダメえええええッ！！ 俺から希望を奪わない男

でくれえッ!!」

「……………」

なんだこいつ。

無機質で冷たい久々津の瞳が、口よりも正確にそう言っていた。

「銀崎も必死だな……………それでお前はどうかんだ、不良生徒」

「……………チッ」

舌打ちすると、久々津は徐に立ち上がった。

正直これ以上付き合っていられない。

彼は……………関わりを拒むのだから。

「あ、おいコラ久々津! 何処行くんだよ、聞き逃げは許さんぞ! お前も気になる女子の1人ぐらいゲロツてけ!」

「……………」

ドアノブに手をかけ、背を向けたまま。

淡々とした声音で、久々津は告げた。

「……お前達が騒ごうが喚ごうが勝手だがな……俺を巻き込むな」

久々津は最後に少しだけ振り返り、部屋に居た全員を睨み付け。

そして、その場を後にした。

部屋に戻った久々津は、明かりも点けずにベッドへと横たわる。

薄く光を残す宵闇が、彼を包んだ。

「……………」

俺が愛するもの。

それは今も昔も、たった1人だ。

愛する女と、仲間3人。それだけが俺の世界だ。

それ以外は全て、どうでもいい有象無象でしかない。

それが、俺だ。

「……それでいいよな——」

——揚羽」

宵闇（後書き）

臨海学校編は楯無が出せん……。

ヒロイン化意見、お待ちしています。

ただそれ童話集『不思議の国の楯無』（前書き）

PV5万突破記念作品です。

本編とは全然関係ありません。全くの番外編です。

尚作者は、『不思議の国のアリス』の内容がともつろ覚えです。

ただそれ童話集『不思議の国の楯無』

むかしむかしのロシアの田舎町。

そこには、とても可愛い女の子が住んでいました。

「私、更識楯無！　ちよっぴりお茶目な１７歳」

悪戯好きな楯無は、いつも人をからかってばかり。

「ぎゃー！　俺の頭がモヒカンに！？　また楯無ちゃんだな、でも可愛いから許す！」

銀崎ベーカリーの店長さんは、そんな単純な人でした。

それはさておき。楯無はある日、無口で不愛想なお兄さんと一緒に、森へピクニックに出かけました。

そして、見付けたのです。

「これから軍事演習だ！ 教官に指定された刻限まで余裕が無い、急がなくては遅刻してしまう！」

黒いバニースーツ姿の銀髪幼女が、物騒な事を言いながら走って行く姿を。

好奇心旺盛な楯無は、放任主義のお兄さんを置いて彼女を追いつけました。

「っゝかまえた！」

「うわ何をする貴様！？ はなせ！」

2秒で捕まえました。

楯無は、とても運動神経が良かったのです。

「ねえねえ、軍事演習って何処でやってるの？」

「軍の機密を教えられるか！」

「……そういう事言っと、くすぐっちゃうんだから」

口を割らない兎さんに、楯無は得意のくすぐり攻撃を仕掛けます。
兎さんは腹筋が崩壊するほどに笑い転げ、ついには白状しました。

「……あ……あその……洞窟の、向こうだ……」

「そう、ありがとう兎さん」

るるんとスキップをしながら、楯無は洞窟へと入って行きました。

暗い洞窟の中に、楯無はわくわくしてきます。

そしてしばらく歩いたら、大きな扉を見付けました。

「この向こうかしら」

鍵のかかった南京錠を針金でこじ開け、楯無は扉を通ります。

するとそこは、鬱蒼としたジャングルでした。

「わー、凄い」

ロシアにはジャングルが無いので、楯無は興味津々です。

そのまま奥へ入ろうとすると……

「待ちなさい、人間！」

やたらカラフルな格好をした、胸の無いツインテールの女の子が現れました。

「だれ？」

「私はチエシャ猫！ この先に行きたかったら、クイズに答えなさい！」

「ふーん、いいわよ」

チエシャ猫は何処から出したのか、ホワイトボードに問題を書き込みました。

『問題：山田麻耶。上から読んだらやまだまや。下から読んだら？』

「……やまだまや」

「正解よ、通りなさい！」

やけにあっさり通して貰えました。

楯無は奥へ奥へと進みます。

すると今度は、ごんまりとした家を見付けました。

「ごめんくださいーい」

「あらヤマネさん。お客様のようすわね」

「そうだね帽子屋さん。お客さんだね」

そこに居たのは、金髪縦ロールの帽子屋と、同じく金髪の中性的な少女でした。

何故か互いに、熱々の紅茶をぶっかけあっています。

「王子様と結婚するのはわたくしですわ！」

「違っよ、僕だよ！」

どうやら王子様の取り合いをしているようです。

こんなところでまで女の醜い争いを見たくなかった楯無は、取り合えず2人を簀巻きにして川に放り込みました。

「がぼがぼがぼがぼ」

残っていた紅茶を1杯貰い、楯無はまた軍事演習の会場を探します。

きよろきよろと辺りを見回していると、向こう側から白馬に乗った青年が現れました。

彼の名はワン・サマー。行く国行く国で王女や貴族令嬢やメイドに至るまで無意識にフラグを立てまくる、外道腐れ野郎でした。

「あ、すいませんお嬢さん。この辺でガラスの靴を履いて毒リンゴを食べて伸ばした髪で塔の最上階から降りた女の子見ませんでした？」

んな奴居る訳ない。

新手のナンパと判断した楯無は、取り合えず王子様を簀巻きにして川に放り投げました。

「がぼがぼがぼがぼ」

さて、物語も大詰めです。

ジャングルを抜けた楯無は、ついに軍事演習場を見付けました。

「ふはははは！ 圧倒的ではないか、我が軍は！」

無数の兵士達……一様にメタリックなウサ耳を付け、「タバネサ
ンダヨ！」と繰り返すロボット兵士に囲まれ、高笑いを上げている
女性。

彼女こそがこの国の女王であり、軍の最高責任者も兼任した傑物。

サウザンド・ウィンターです。

「む？ おいそこの雑種う！ 何処から紛れ込んだ！」

「え、私？」

どこぞの慢心王のようなノリのサウザンド・ウィンター。

楯無はロボット兵士メカタバネに捕えられ、椅子に縛り付けられ
ました。

「ねえ、私どうなるの？」

「ふはははは、知れた事！ 今から私と」「タバネサングダヨ！」「
「だー！ かぶせるな馬鹿どもが！」

サウザンド・ウィンターは、楯無にチェス勝負をするように言います。

勝てば無傷で帰してくれる。

負けたら体を改造して、ここに居るメカタバネの一員にするそうです。

「さあ、勝負――

そんな中途半端なところで、楯無は目を覚ましました。

「……うつん……あれ、兄さん？」

「起きたか妹」

右頬に蛇の刺青を刻んだ兄の顔が、上にあります。

楯無は、お兄さんに膝枕をして貰っていました。

「魔されていたぞ。あと寝言で軍事演習がどうか……大丈夫か？」

「あ、うん大丈夫。ごめんね兄さん、重かった？」

「軽いものだ、お前1人ぐらい」

殆ど笑った事の無いお兄さんが、楯無に向けてほんの小さくだけど笑い掛けました。

その日2人は、仲良く手を繋いで帰りました。

嵐の前兆

臨海学校2日目。

この日は、午前中から夜間に至るまでの丸1日、ISの各種装備試験運用とデータ取りが行われる。

特に専用機持ちは、大量の装備が待っているのだからさぞ重労働だろう。

「ぎゃあっ！？ なんじゃこの分厚いリスト！？ いくらなんでも多過ぎだろこれ！ どーなってんだ責任者呼んで！！」

「黙れ銀崎。『牙神』は初の4脚型ISだ、その分パッケージや追加装備のデータ取りが多く必要になる。きりきり働けよ」

砂浜に響く悲痛な声。けれどそれも専用機持ちの義務であるのだ

から、是非も無し。

とは言え……

「……………」

専用機どころか、ISそのものに触れる事さえ許されていない久々津には、まるで関係のない事なのだが。

彼は周りと少し離れ、波打ち際から地平線を眺めていた。

「ちーちゃ~~~~~~~~んっ！！！」

しばらくそうしていると、その後ろを砂煙を立てんばかりの勢いで、脚部にISを部分展開させた女性が通り過ぎた。

が、それさえもまるで意に介さず、久々津は海の方こうを眺め……否。

その彼方にある、見えない『何か』を睨んでいた。

「ど、どうしよう……やっぱり声かけた方がいいのかな？」

「けど……」

彼を遠巻きにしつつも、数名の女子達がひそひそと話しあっている。

今回の試験で、久々津と同じグループに分けられた生徒だ。

担任の千冬いわく、ISへの搭乗許可は出ていないにしろ一応見学だけでもしておけとのこと。

やがて意を決したのか、女子生徒の1人が久々津へと歩み寄った。

「あ、あの久々津君……」

「……………」

「えっと……う、『打鉄』の稼働試験始めるから……こっちに……」

反応を見せない久々津に、どんどん言葉が尻すばみになる女子生徒。

そんな中。

「……………おかしい」

「ふええっ！？　ぐ、ごめんなさい！」

「……………？」

ぼそりと漏らした彼の呟きに怯えたのか、女子生徒が頻りに頭を下げる。

対する久々津は、今になって初めて彼女の存在に気付いたのか、怪訝そうに首を傾げていた。

「何をしてる」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい——え？」

「意味も無く謝るな。低く見られるぞ」

呆れ顔の久々津に、女子達は目を丸くした。

彼の表情が変わるところなど、今まで見た事が無かったのだ。

長い髪を僅かに振りつつ、久々津は再び海へと視線を戻す。

「……おい」

「うやっ！？ は、はい！」

「変な声を出すな。……ちょっとここに来い」

「は、はははい！」

自分の隣を指差す久々津。

呼ばれた女子生徒は、ガチガチに固まりつつも言われた通りにした。

「……………」

「（……………わ……………あんまり見かけないし、怖くてちゃんと見た事無かったけど……………ホント、びっくりするぐらいキレイな顔だ……………」

「……………耳を、澄ませてみる」

「あ、はい」

ちらちらと久々津の方に視線を遣りながらも、耳を澄ます。

久々津自身も、髪をかき上げ隠れていた耳を露出させた。

「（久々津君の耳、ちょっと尖ってて可愛い……………」

「……………なんか羨ましい……………」

「黙れ。聞き取れない」

「……………ひゃい……………」

ひそひそと後ろで話していた生徒達が、彼の一喝で静まり返る。

だが恐怖政治と言うより、何処かカリスマ性を感じさせる声音だった。

横に立った女子生徒は思う。

もしかして……久々津君って思ったほど怖い人じゃないのかな、と。

「……………何が聞こえる」

「えっと……波と風の音に、あとなんか向こうで赤いISがミサイルを撃墜してる音」

何か変なものが混じっていたが、それを気にする余裕が無い。

久々津の横顔が、真剣そのものだったのだ。

「……風の音がおかしい。波も、少しだけ波長が乱れている」

「え？ え？」

「凶事の前兆だ。精々気を張っておけ」

「え、あ、久々津君！？」

急に踵を返したかと思うと、久々津は旅館の方へ戻ってしまった。

追おうにも何故か追えず、その場に立ち尽くす女子生徒達。

「現時刻よりIS学園教員は特殊行動任務へと移る！ 今日のテスト稼働は中止、各班ISを片付けて旅館に戻れ！ 連絡があるまで各自室内待機する事、以後許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！」

千冬が生徒達全員に向かってそう怒鳴りつけたのは、それからすぐの事だった。

魔女と福音（前書き）

原作とは異なる事件。

福音を操り喜劇を作り上げた『魔女』。

飛竜は戸惑い、先を予見した蚣は笑う。

幕を開けるのは、誰も知らない影の戦い。

魔女と福音

「では、現状を説明する」

大座敷に集められた教師陣と、俺達専用機持ち。

俺はワクワクしてた。この臨海学校で待ちに待ってたイベントがついに来たんだからな！心躍らない方がどうかしてるぜ。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡が入った」

一夏達が泡食ってる中、俺だけは内心でテンションを上げまくってた。

福音事件来た！ ナターシャさんのフラグチャンスがキター！

……ゴホン！ いかんいかん、平常心平常心。

周り見てみるよ。一夏と篤はともかくとして、代表候補生の面々は真剣そのものよ？ 俺だつて一応、母さんが重役やつてるシュライ・キサラギ社のテストパイロットで日本代表候補生なんだからほら、キリツとしてないと。

H A H A H A――

「そして情報によると、『銀の福音』は突如現れた正体不明のI Sに全システムを乗っ取られたらしい」

「……なんですと？」

なにそれ。福音を乗っ取った？

そんな展開、原作に無かったぞ！？

「アメリカ政府は、この正体不明の機体を『ブラッディ・ウィッチ血塗れの魔女』と仮名し、所属の捜査にあたっている」

やっぱり。聞いた事のない機体名だ。

どうなってる。まさかこんな所で原作改変なんて。

「その後『魔女』は反応を完全にロスト。だが福音は衛星による追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過する事が分かった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処する事となった」

「ち、ちよつと待つて欲しいッス！ ロストしたつて、その『魔女』つてのは一体なんなんスか！？」

「……分からん。今判明している事は、軍用ISさえも掌握できるほどの高いハッキング能力を有し、ハイパーセンサーをもすり抜ける完全光学迷彩を搭載した、隠密性に優れた機体である事だけだ」
パーフェクトステルス

どうすんだよそれ。厄介なんてもんじゃねえぞ。

向こうの位置は分からない、けど下手すりゃ俺達の専用機まで乗っ取られちまう。

一夏の野郎はいまいち分かってないみたいだけど、他の皆はその危険性に気付いてるのか一様に渋い顔だ。

……大丈夫なのか？

「だが、少なくともISにハッキングする際はステルスを解除している姿が確認されている。存在が分かっていたら、対処のしようはある」

「……そツスカ」

「それに魔女は武装を積んでいないそうだ。今は直接危険のある福音を対処する」

……大丈夫の筈だ……どうにも改変してるところがあるけど、今回の件は篠ノ之束さんが筈に晴れ舞台を用意する為、裏で糸を引いた事件の筈。

だったら、ぶつけてくるのはたぶん福音だけだ。それを暴走させる手段が変わったただけだ。

平気平気、対処できる。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」

っしゃあ！ 魔女だか何だか知らんけど、やったるぜ！

「それでは作戦会議を始める。意見がある者は挙手するように」

こつからは暫く原作通りの展開だ。

さーで、腕が鳴るぜ。この俺、銀崎飛竜とその専用機『牙神』の見せ場が――

「……………ん？」

ちよつと待て。ちよつと待てちよつと待て。

俺の専用機名は『牙神』。ISは人型であると言う固定概念を捨てた、世界初の4脚型IS。

そこで、現行IS内では最も巨大。機動力もそれ相応に低い。

つまり飛行能力も低い。

と、言う事は。

「すみませんツス織斑先生。今回の俺の役目は？」

「…………『牙神』では福音に追い付けん。お前は万一に備え旅館付近の防衛だ」

……………やっぱいいいいいいいつ！！！！

駄目じゃん俺！ 考えてみれば今回の戦場海の上だよ！

『牙神』ぶつちやけ空戦能力凄いいよ！ 何で狼型にしたんだ
バーカ！ 開発者のバーカ！ ハゲちまえ！

「ふーん。ここをこーして、あれをこーしてっと。うんうん、これならすぐに『紅椿』の調整終わっちゃうね、やったね束さん！」

ああ！？　なんか俺が専用機に絶望してる間にも、何処からともなく現れた束さんが既に紅椿の調整を始めてる！？

もう俺完全に蚊帳の外じゃん！　最近こんなのばっかだよ！

チクショー！　こうなったら俺も一夏に高機動戦闘のレクチャーしてるセシリアを邪魔したる！！

「あとは通常時よりも相対的な速度が上がっているために、射撃武器のダメージが大きいんですよ。当たり所が悪いと、1発でアーマブレイクになったりしますから、気を付けて下さい」

「山田先生まで！　ああもうっ、どうして皆さんわたくしの邪魔をしますの！？」

「一夏あッ！　分かっているとは思うが、高速戦闘状態で変な曲がり方すんじゃないぞ！　下手すりゃ装甲が空中分解するからな！」

「……銀崎さんまで……」

うはははは！　もう知った事かよ！

どーせ一夏はいつぱん落っこちるんだかな！

……再戦の時、俺の出番あるといいけどな。

「……………へえ」

大座敷の、扉一枚隔てた先。

扉に背を傾け、静かに目を閉じていた青年。

一部始終を耳にしていた久々津は、にやりと口の端を上げた。

「暴走ISに、世界屈指の天才の登場か……これをただの偶然と捉える奴は、余程頭の中身が腐っているだろうな」

ククと、声無く笑う久々津。

「さあて、何を企んでいる？　IS程度で世界を手にした気でいる、がらくた

自分の矮小さにも気付けない、おつむの弱いうさぎさんは「

音も気配も何も無く、久々津はその場から歩き去る。

そして——窓の向こうに視線を遣った。

無機質な黒ではない、燦然と輝く『金色』の瞳で。

「クク……うさぎさんの光学迷彩ステルスより、俺の弄られた眼の方が性能は上みたいだな」

彼の視線の先には。

歪な姿をした、1機の赫いISが居た。

「感謝しろよ愚図ども……『魔女』の相手は俺がしてやる」

魔女と福音（後書き）

相対した魔女と蚣。

血塗れの魔女

久々津・オテサーネクは、造られた人間である。

もう20年以上も前の事。かつてある科学者が、『究極の人間』を追い求めて心血を注いだ計画があった。

そのプロジェクトの名は、『キメラ計画』。1000にも及ぶ人間の遺伝子を配合、強化し、生まれた赤子の身体を改造、素手で猛獣をも下す兵士を完成させるのが目的だった。

けれど、人間の脆弱な身体では拷問の様な改造に耐えきれず、計画は失敗に終わるかと思われた。

だがしかし、唯一その過程に耐え切り、見事『キメラ』として完成した素体。

今からおおよそ16年前に生まれた、それが久々津だった。

久々津・オテサーネクは、そうして生まれたのだった。

「ッ」

旅館から少し離れた山中。

堂々と正面から接近し、拳を打ち込んできた『魔女』のそれを、久々津は側転で危なげなく回避する。

そしてその反動を利用して、数発魔女を蹴り上げた。

ガガッ！ ガガガッ！！

「……ん、堅いな」

若干空中に浮かせたものの、やはりエネルギーシールドを抜けない。
い。

当り前だろう。いくら化け物染みていても、ただの蹴りでミサイルさえも防ぎきるようなシールドを貫くのは無理だ。

「だが所詮は人の作ったもの。完全なんてあり得ないんだよこれが」

キュルキュルキュルキュルッ！

一瞬浮かせた隙に、辺りに張り巡らせたワイヤーを締め上げ、久々津は魔女を拘束する。

そして――

「エネルギーシールドは、一定以上の電圧を防げない」

ワイヤーの先端から、用意したヘビースタングアンで高圧電流を流した。

バチバチバチッ！と紫電が奔り、魔女の関節部から煙が上がる。

効いている。が、魔女は装甲を軋ませながらもワイヤーを断ち切り、今度は間違いなく久々津にその拳を叩き込んだ。

「……チッ」

咄嗟に左腕でガードしつつ後ろに飛ぶ。

だが、そこはISの膂力。バキバキと彼の腕から粉碎音が鳴り響き、炭素フレームの骨をいとも簡単に砕く。

「……痛くは無いんだ、残念ながら」

けれど痛覚の存在しない久々津は、忌々しげに魔女を睨むのみ。

「この程度、ナノマシンを集中させれば1時間足らずで治る……が、
久々に身体を壊されて気分が悪い。来いよガラクタ、徹底的に破壊
してやる」

『……………R i』

その言葉に呼応したのか、魔女は低音のマシンボイスを鳴らし。

久々津へと再び、殴りかかった。

そして。

「…………ふん」

身体の各所を損傷しながらも、久々津はちょうどいい大きさの岩に腰掛け、殆ど機能を停止させた魔女を見据えていた。

「哀れだな。恐らくお前は、今回の為だけに造られたんだろう？
武装が無いどころか、基本的なスペックまでもが低過ぎる。改造されてるとは言え、生身の人間に負けたのがこの上ない証拠だ」

既に魔女はステルスさえも起動できない。

久々津の瞳も、金から黒へと戻っていた。

「……………R？」

「悪足掻きは止める。徹底的にぶち壊してやったんだ、まともには動けねえ」

魔女の四肢は砕け、胴体も原形を留めていない。

「…………R i……………R i」

けれどそれでも、魔女はその機能を停止させず。

まるで嘆いているかの様に、マシンボイスを響かせていた。

「……………」

怪訝な顔をする久々津。

やがて何かを思い至ったのか、魔女に向けて言葉を投げかけた。

「……………」まさか、悔しいのか？ 俺に負けて、お前を作った親は助けてもくれない。まるで無意味な自分自身が悔しいのか？」

「…………… Ri」

頷くかのように、コアが明滅した。

その何が面白かったのか、久々津はククと笑う。

「成程、そうか。こいつはいい」

人でも無いくせに、存外人らしいじゃないか。

…………… 気に入った。歪で禍々しいフォルムも、俺に相応しい。

それに、ステルス機能とハッキング能力。

考えてみれば、素晴らしく素敵じゃないか。

「ククク……なあ、魔女」

久々津は立ち上がり、魔女の前で屈み込む。

そしてそのボロボロの機体に――手を差し伸べた。

「悔しいなら、悲しいなら。そして見返したいのなら。お前にその機会をやるっ」

俺達は同じだ。

互いに無意味に生まれて、そしてこのまま無意味に朽ちて行くなら。

一緒に足掻いて、共に朽ちよう。

それもまた、悪くないとは思わないか？

「俺と来いよ。『ブラッディ・ウィッチ』」

血塗れの魔女（後書き）

戦闘シーン苦手。

超苦手。

寂寥

概ねは原作通りに進んだ筈だった。

織斑一夏は福音に落とされ、残された少女達は敵討ちを誓う。

されど福音は何処までも立ち塞がり、少女達の翼を？ぐ。

少女達を救ったのは、新たな力を得た一夏であった。

そして全ては原作通り、篠ノ之束の思う通りに進んだ。

筈、であった。

たったひとつのイレギュラー。

久々津・オテサーネクの存在を、除いて。

岬に立ち、互いの方を向かず話している人影がふたつあった。

篠ノ之束と、織斑千冬。

彼女等は静かに、互いしか知らない事を話していた。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ。それに際して、新型の高性能機を作戦に加える。天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューと言う訳だ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才が居たものだね」

「ああ、すごい天才が居たものだ。かつて、12ヶ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

束は答えず、千冬も言葉を止める。

そのまま暫く、時間だけが過ぎた。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は、楽しい？」

沈黙を破ったのは、束だった。

「……そこそこにな」

「そうなんだ」

吹き上げた風が、強くうなりを上げる。

「――」

その風の中で、束は何かを呟き――

「何処に行くんだ？ せつかくいい月夜なんだ、酒に付き合えよ」

「「っ！――？」」

突然聞こえて来た、男の声。

2人は同時に振り返る。

「と言っても、俺はジュースだが。酒は揚羽としか飲まない」

「久々津！？ お前、何故ここに！？」

そこには赤い髪を風にたなびかせ、コーラを傾けていた久々津が居た。

彼は持っていたビールを、2人に投げ渡す。

「俺は特に用なんか無いけどな。『コイツ』がお母さんに会いたいつてうるさいから、さっきからずっと話し掛けるタイミングを待ってた。お陰で今回の件の動機を知れたのは、ちょっとした収穫だったか」

コイツ、と言って。

久々津は左手の人差し指を突き出し、そこに嵌められた赫い鴉の嘴を模したアーマリングを示した。

「それは……まさか……」

それを見て、軽く目を見開いた束。

「察しの通り、『ブラッディ・ウィッチ』だ。お前が正式名称をつけなかったから、仮名をそのまま使わせて貰ってる」

「な！？ 久々津お前、何処でそれを！？」

驚きを露わにする千冬に向け、久々津は口の端を釣り上げる。

「旅館の近くでうろついてたから、山の中まで誘導してそのあとボコボコにしたんだよ。流石に俺の方も大分壊されたが、もう治った」

何て事無いように、骨が粉碎していた筈の左腕を軽く回した。

「そ、そんな筈！ その子は確かに戦闘スペックは低いけど、それでも素手の人間に負けるなんて――」

「あり得ない、か？ よく覚えとけ、あり得ないなんて事はありません。矮小な人間が作ったものを、同じ人間がどうこうできないと本気で思ってるのか？」

クク、と久々津は笑う。

「世界は自分の掌の上なんて思ってる奴が、案外誰かに踊らされてるものだ。篠ノ之束」

「……………」

「おお、怖い怖い。そんな目で睨むなよ」

さもおかしそうな口調で、何処までも無表情。

闇の中を覗いているかの様に、2人は久々津の内を読めないでいた。

「あ、そうだ。折角だからお前達にひとつ警告をしておいてやろう」

「警告……………だと？」

怪訝な顔で、千冬が呟く。

「今回の件、派手に動き過ぎたな篠ノ之束。どれだけ痕跡を消したって、この事件はそれなりの奴等の耳には入っただろうよ」

「……………それは……………どういう意味かな？」

「ファントム・タスク
亡国機業」

「「っ！！」」

その名が出た瞬間、2人の顔が一気に強張った。

久々津はまた一瞬だけ、口の端を上げる。

「突然2機も現れた第4世代IS。それも片方は、第2形態移行ま
で済んでいる。奴等からすれば恰好の獲物だろう。大事な妹や弟の
寝首をかかれない様に、対策でも打っておくんだな」

「そんな事はさせない！ 一夏は、あいつは私が守る！」

「俺に簡単に後ろを取られたくせにか。俺がやろうと思えばお前等
纏めて殺せたぞ？ 人を殺した事も無い、所詮キレイな世界での『
最強』如きが。お前を相手取るくらいなら、まだ更識楯無の方が怖
い」

「……………くっ」

現状がいかに危ういものであるか。

辛辣な言葉で、久々津はそれを教える。

「……………よくよく考えとけよ。じゃあな」

「ま、待て久々津！ お前は、お前は一体なんだ！？ 何故亡国機業の事を、いや違う。お前は、どこまで知って――」

「……………ねえ」

千冬の言葉を遮って、久々津に声をかけたのは束だった。

歩き去ろうとしていた彼は、首だけを振り返らせる。

「束さん、聞きたい事は色々あるけど……………どうして、警告なんてしてくれたの？」

「……………大事なものを失う辛さを、お前達よりちょっとだけ知ってるからさ。これで話は終わりだ、後はお前達でどうにかしろ。面倒事は御免だ」

ほんの少し。

そう言った久々津の声音は、ほんの少しだけ悲しげだった。

再び正面を向き、彼は歩き出す。

今度はもう、振り返らなかった。

いずれ必ず、亡国機業は来るだろう。

……その時が、痛みを伴う再会とならないように願う。

「ムシのいい、話だな」

10年前、「行くな」と泣いた蛇と蜘蛛を置いて、揚羽の手を引き亡国機業から逃げ出した俺に。

そんな事を願う資格が、ある筈も無いのに。

久々津・オテサーネク 専用機紹介（前書き）

銀「よう皆！ 今回の一件でも見せ場の無かった……飛竜です」

久「……………哀れな」

銀「久々津にまで同情されたよ！ いつもみたく辛辣にされた方がまだよかったよ！」

カ「頑張つて。努力はいつか、報われるかも」

銀「かもつてなんですかカーテンさん……」

久「……………今回は、俺の専用機紹介だ」

久々津・オテサーネク 専用機紹介

名称：無名 ↓ 『ブラッディ・ウィッチ 血塗れの魔女』

世代：第3世代

系統：遠隔操作型、非戦闘タイプ

製造者：篠ノ之束

操縦者：久々津・オテサーネク

スペック S
F

火力 F

装甲 F

機動力 E

飛行速度 E

エネルギー効率 A

射程 |

操縦難易度 C

シールドエネルギー総量 300

ISの生みの親である篠ノ之束本人が、妹の簪に専用機デビューの晴れ舞台を作るべく、『銀の福音』暴走事件を引き起こす為にのみ作成、使用した機体。スタンド・アローン独立稼働能力を備えていたが、久々津との戦闘で機能停止し、修復後は遠隔操作へとランクダウンしている。リモート・コントロール武装は存在しない。

カラーリングは黒に近い赫。禍々しさを感じられる外見だが、現行IS内では最も小柄で独立起動させると150センチ程度しかなく、基礎スペックも低い。久々津本人が起動、装備すると、ステルスにより完全に姿を消せる。

待機状態は、左手の人差し指に嵌められた赫いアーマリング。

機能

『神の左手』：ハイパーセンサーをも完全にすり抜ける、左腕部に搭載された完全光学迷彩装置。ハイフェクトステルス完璧を求めて決して見破られる事の無いよう篠ノ之束が作り上げたが、久々津のアンチ・ステルスを施された眼に看破された。

『悪魔の右手』：他ISのシステムに介入し、自在に操る事のできる右腕部に搭載されたハッキング装置。イメージ・インターフェイスを導入しており、右腕でISに直接触れて使用する。ハッキングに要する時間はおおよそ数秒。『神の左手』とは相性が悪く、使用時にはステルスが解除される。

久々津・オテサーネク 専用機紹介（後書き）

久「ついでに今回は、アンケートの結果発表だな」

銀「へ？ 何それ、俺知らないけど」

カ「知らないままなら、良かったかも知れない……」

久「……結果はこれだ」

更識楯無ヒロイン化アンケート

久々津のヒロインに！ 7票

飛竜のヒロインに！ 1票

銀「……………ナニコレ」

久「使えない野郎だ……」

カ「と言う訳で、更識楯無は久々津のヒロインになりました」

銀「え、えええ！？ ちょ、ちょっと待ってくれよ！ 再戦、再戦は！？」

カ「ないわ」

銀「そんなあーっ！」

久「本当に役立たずめ……俺が愛しているのは、揚羽だけだと言うのに……」

銀「なんかノロケ始めたんですけどこの人っ！！」

久「揚羽は本当に美しい女だ……シルクのように柔らかな髪、ルビーなど敵にもならない紅の瞳……それでいて誰よりも穏やかで優しく、けれども芯の通った——」

カ「さようなら、私帰ります」

銀「あ、待ってカーテンさん！？ 置いてかないで、俺も帰る！！」

久「まあ聞いて行け。それでな——」

銀「誰かヘルプ！　へーーーーーーー！　ルプッ！！！！！！」

過去の夢（前書き）

日間19位……！？

じゅーきゅー位で。

お気に入り件数も昨日の2倍近くに……。

結構びつくりした。

過去の夢

久し振りに、夢を見た。

まだ俺が久々津・オテサーネクでも、揚羽のくれた名である『
××』でも無く。
×

13年以上も前、『蚣』と呼ばれていた頃の夢を。

「い、いてて！ うう……蚣！ もうちょっと優しくしてくれよ！」

薬液のにおいが漂う医務室のような場所で、1人の少女が涙声でそう言う。

まだ10歳を幾らも過ぎていないであろう彼女は、身体のうちこちに切り傷や擦り傷を作っており、手当てを受けている最中だった。

「仕方ないだろう？ 消毒液はしみるんだ。菌が入って化膿でもしたら痛いじゃ済まなくなる、これぐらい我慢しろ」

「んう……私も蚣みたいに、すぐ怪我が治ればいいのに」

「はははっ。痛いのが嫌なら、あんまり無茶をするなよ蜘蛛。今日の訓練だって、見てることちが冷や冷やしたぞ？」

蜘蛛と呼ばれた少女は、朗らかに笑う蚣を拗ねたように睨んだ。

「……だって私、蛇や蠍より訓練成績悪いから。その分いっぱい頑張らないと、足を引っ張っちゃうもん」

「悪いっただって、そこまで差は無いぞ。それにお前達が実戦に投入されるまで、まだ数年はある。そう気を張るな」

「……………蚣が」

「ん？」

ぼそぼそと、蜘蛛が言葉を続ける。

「蚣が私達の分まで実戦に出てるから。だから私達は時間があるんだろ？」

「……俺は少し、特別だからな」

この研究施設に居る4人の『兵士』。それぞれに与えられた名は、『蠍』、『蛇』、『蜘蛛』、そして『蚣』。

その中でも、蚣は確かに特別だった。

他の3人は遺伝子強化のみを施された遺伝子強化素体であったが、アドヴァンスド彼だけは異なっていたから。

遺伝子強化だけでなく、肉体改造により極限まで性能を強化された改造人間。ワイルドカストムその過程では、過酷な改造に耐えさせる為に身体を急速成長させる。

故に蚣は、生まれてから1年後には現在と全く変わらない外見をしていた。

成人男性と比較しても遜色ない1歳児。知られざる事実だが、彼がいわゆる『転生者』であった事が、その外見に相応しい精神をも備えさせていた。

そんな彼を研究者達は初の『キメラ』成功体として喜び、様々な

戦場へと駆り出した。

生まれてからたった数年の間に蚣が殺した人の数は、彼が生きた日数よりも多い。

「俺がお前達の中で1番強くて頑丈だ。だから俺がお前達の方まで戦うのは、当り前だろう？」

「けど！……私達の方が年上なのに、蚣ばかり辛い目に遭って……」

「いいんだよ。俺は最初から大人で生まれた様なもんなんだから」

蚣は優しく、蜘蛛の頭を撫でた。

彼女はそれが心地よかったのか、眼を細めて頬を染める。

「無茶するのは大人の特権だ、焦る必要なんて無い。お前は将来絶対美人になるから、傷なんか残したら大ごとだぞ？」

「ふえ！？ ホ、ホント！？ ホントに私、美人になると思う！？」

「ああ。今だってこんなに可愛いんだからな」

いよいよ真っ赤になってわたわたと慌てる蜘蛛を見て、蚣はくすくすと笑った。

今ではもう出来なくなってしまった、本当に優しい笑みで。

蜘蛛の柔らかい前髪をかき上げ、その額にキスする。

「お前も蛇も蠍も、大事な大事な俺の家族だ。お前達が大きくなるその時まで、俺が命を懸けて守って見せる。だから……ゆっくり大きくなれ」

「……………うん」

照れて下を向き、蜘蛛が頷く。

「……………あのさ、蚣」

「どうした？」

「その……私がさ、大きくなって蚣に追い付いて……それで蚣の言う通り美人になったら……そしたら——」

彼女の言葉を遮るかのように。

医務室の扉が勢い良く開かれ、薄い金髪の少女と、桜色の髪の少女が駆け込んできた。

「蚣さん！ 蜘蛛は大丈夫ですか！？」

「大怪我……したって……聞いた……」

「……はあ？」

2人は息を切らせていたが、蜘蛛の姿を見て眼を丸くする。

「あら蜘蛛……元気そうね？」

「……怪我、は……？」

「蛇、蠍……何処で何を聞いてきたか知らないが、こいつは大怪我なんてしてないぞ。精々が擦り傷切り傷だ」

「……うん」

言葉を遮られた蜘蛛は、涙目になって落ち込んでいた。

意図を察した蚣が、まったくすすすと笑う。

「そうしょげるな。お前を心配してくれたんだからな」

「……うん」

蜘蛛の手当てを終え、蛇は道具を棚に仕舞った。

「さ……そろそろ昼飯だ。食堂に行くぞ」

「はい」

「……うー」

「……ん」

三者三様の返事をして、少女達は蛇の後に続く。

その姿はまるで、仲の良い家族そのものであった。

「……………」

暗闇の中で、目が覚めた。

酷く気だるい。最悪の気分だ。

「……なんで」

何で今更……あの日の夢を。

『お前達が大きくなるその時まで、俺が命を懸けて守って見せる』

守れなかった約束。

……否。俺が自ら破った約束。

「………」

俺はいつか、その罪の報いを受けるのだろう。

あるいは罪を背負ったまま、朽ちて消えるのかも知れない。

「今日から、夏休みか……」

16回目の夏。

もう時間は、そんなに多く残されていない。

無理矢理な急速成長、拷問に等しい肉体改造。

その全てが、俺と言う人間の未来を削った力なのだから。

『キメラ』は長く生きられない。

20回目の夏を迎えたその時、俺の命は尽きるだろう。

その出会いは（前書き）

はあ！？ 日間6位！？

どうなっただ一体……。

その出会いは

学生寮1013号室。

そこには今、1人のバカが居た。

「お・れ・は・ブルース！ ララララー！！」

椅子に腰かけ、エレキギターを掻き鳴らしている茶髪の男。

彼の名は銀崎飛竜。久々津及び楯無にちゃんと名前を覚えて貰えない、不幸極まりし転生者である。

「ジャンジャンジャンジャーン！！」

「……………」

ベッドに横になりつつ本を読んでいた久々津は、調子外れな飛竜の演奏に気分を害する風も無く、我関せずとばかりに読書を続け――

「イエーイ！ ベイビー！！」

「うるせえ」

——ていたと思いきや、徐に立ち上がって彼のギターを一瞬で蹴り壊した。

「うぎゃあああああ！？」

「この下手糞が。さつきから聞くに堪えない演奏しやがって、死ね」

「だから練習してたんじゃねえかよ！ 壊す事なかったじゃん！
どうしてくれんだよ俺のレスポール！！」

「無駄に高級品なんざ使ってるからだ。お前みたいな、センスの欠片も無いカスに使われるギターが哀れ極まりない。壊した方がまだ救われる」

久々津のその言葉に、飛竜が床へと崩れ落ちた。

「お、おおお……相も変わらず人の心を的確に抉り取る辛辣発言……
…そんなだから友達できねえんだよ！！」

「別に要らん。とにかく読書の邪魔をするな」

言いただけ言っで、彼は先程と同じ位置に戻る。

飛竜はしばし「ギター……ギターが……」と落ち込んでいたが、やがて気を取り直したかの様にぶんぶんと首を振り、久々津に近づく。

「ところでさっきから何読んでんだ？ 人間失格？」

「失せろ」

ちょっとした意趣返しのもりでニマニマしていたら、目潰しが飛んできた。

「目があッ！？ 目があああああッ！！！」

「黙れ」

「おぼろばッ！？」

寝転がったままの久々津に人外脚力で蹴り上げられ、そこから空中コンボを決められた飛竜は、ポンポンとピンボールが如く部屋中を跳ね回る。

邪魔されて機嫌が悪いのか、余り手加減されていない。

「あ、あががが……ちょっと、お花畑見えた……」

「チッ……頑丈な奴」

頭上で星を回しながらも立ち上がる飛竜に、忌々しげな舌打ちをする久々津。

「まったく……で、ホントに何読んでんの？ 夏目漱石？」

「……ガンスリンガー・ガールだ」

「何故に！？」

先日楯無が持つて来たものである。

ある意味ぴったりのチョイスだった。

「あー成程……そう言えば楯無さん、色々この部屋に持つて来てたな」

「ここに移住でもする気か……あのガキは」

「それマジ嬉しい！ つうかあの年上だって！」

……キメラおれからすれば、ガキ同然だ。

そう言った久々津の言葉は、飛竜には届かなかった。

部屋だと飛竜が煩いので、久々津はいつものあの場所に向かう事にした。

あそこを知っているのは自分以外だと楯無だけだし、その楯無も昨日から実家に帰っていて今は居ない。

……思えば、最初からそうすれば良かった。

「それにしてもあの女……本当にどういっつもりだ」

寮の廊下を歩きつつ、久々津はぼそりと呟く。

あの女、とは当然楯無の事である。

「毎日毎日付き纏って来やがって……」

再三だが、仕合う事は構わない。

俺の落ち度であるし、何より言い出したのは俺自身。口約束でも約束は約束。約束^{それ}を破る様な事は、もう2度としたくない。

だが……それ以外の事で付き纏われるのは迷惑だ。

「……………」

あいつは、苦手だ。

顔はそこまで似ている訳じゃない。性格もどちらかと言えば逆。

けれどあの髪、あの瞳。

そして何より娘であると言う事実が、あいつと揚羽を連想させる。

腹立たしい事この上ない。

「……………」

いつそ真実を教えてしまおうか。

そうすればあの女も俺に付き纏わなくなるだろうし――

「……チッ」

そこまで考えて、我にかえった。

教えてどうする。教えてどうなる。それで何が解決するんだ。

何をしたところで、俺があの子を揚羽と重ね合わせてしまっている事実は変わらないし、それに対して感じている罪悪感も消えない。

ああ畜生。どうすればいい。

あの女の所為で俺の『闇』が乱される。俺自身を隠していられなくなる。

どうすれば、この乱れと揺らぎは消えるんだ。

どうすれば、どうすれば、どうすれば――

「きやあッ」

「ッ」

思考の波に溺れていた俺は、何かに当たった。

どうにも、角を曲がったところで鉢合わせた女子生徒とぶつかっ

たらしい。

ドサドサと、そいつの持っていたらしき本の山が床に落ちる。

「チツ……何処見て歩いてやがっ!？」

苛立っていた俺は、咄嗟にその女子生徒に怒鳴ろうとして。

視線を向けて……絶句した。

「な……な………」

「……………」

床に尻餅をつき、こちらを見上げる女子生徒。

綺麗な水色の髪。物憂げな紅の瞳。

全体的に線が細く、気弱そうな印象を受ける顔立ち。

あくまで「面影を感じる」程度の更識楯無とは、根本から異なる。

——まるで同じ。

そう思っぐらいに、俺がそう思ってしまったぐらいに。

目の前の少女は。

「あげ……は……」

まるで揚羽と、瓜二つであったのだから――。

その出会いは（後書き）

感想で、久々津と飛竜が同じ部屋である事の違和感について指摘されたのでその説明を。多分本編じゃやらないんで。

確かに2番目と3番目が同じ部屋なのは違和感がありますが、そもそも飛竜は2番目じゃありません。今まで明記してませんでしたが一夏と飛竜はほぼ同時期にIS適性を発見され、どっちが先とか無く『世界で初めて発見された男性IS適性者2人』って扱いだつたんですね。久々津の件についても、彼の素性が不透明な事は学園でも教頭以上の本当に一部の人間しか知りませんし、表向きはただの『孤児』って事になってます。それにISを持っている訳でもありませんし、専用機持ちの男子生徒と一緒に滅多な事はしないだろうとの判断の上です。良くも悪くもIS至上主義な世の中ですから。そして忘れられがちですが、飛竜はあれでも大企業のテストパイロットであり、IS適性Sの学年最強クラスの実力者なので、一夏と比較すればどちらが選ばれるかは明確でしょう。勿論この辺の事情は、千冬達一般教師は知りません。

授業免除とかで千冬達が怪しまなかったのも、彼が精神障害を患っていて、他者との交わりをひどく嫌う故の配慮であると説明されており、転入初日の彼の言動に千冬が殆ど口を出さなかったのも、その辺の理由でどう接すればいいか分からなかったからです。幾ら優秀って言っても、所詮は年齢から考えれば社会的にもまだまだ若僧の新米教師ですし。

それと、飛竜と一夏がなぜ同じ部屋でないのかとも指摘されましたが、シャルロットが転入してくるまでは同じ部屋でした。知って

の通りシャルロットは転入当初は男子生徒として扱われていた為、学園に不慣れな彼女をせめて同性と一緒にの方がいいだろうと言う判断から、飛竜を空き部屋に移してシャルロットを一夏の部屋に入れた訳です。シャルロットが再転入してきたすぐ後、部屋を戻す間もなく久々津が転入して飛竜の部屋に入ったのです。

……まあ、一応こうした事情があると裏付けしてたんですが……私の表現力不足と飛竜の雑魚臭さの所為で誤解を招く結果となってしまうました。

申し訳ありません。

似合わないよ？（前書き）

誰だよ……この久々津。

似合わないよ？

夏休みに突入し、生徒の半数以上が帰省しているIS学園。

人気の無いその敷地内を、肩を並べて歩く2人の男女が居た。

「……………あ………ありがとう、………本、運んでくれて……………」

「……………ああ……………」

白い制服を着た、水色の髪的女子生徒。

黒い制服を着た、赤色の髪的男子生徒。

男子生徒は1冊1冊が電話帳の様に分厚い本を10冊近く抱えているにも拘らず、軽々とした足取りであった。

「何故台車を使わなかった。これだけの重量、女の腕力では無理がある」

「……忘れて、たの」

「そうか」

申し訳無さそうにしながら、男子生徒……久々津の横を歩く少女。

彼女の名は、更識簪。あの更識楯無の妹であった。

「……………」

前も見えなくなるほど大量の本を抱え、歩いていた彼女にぶつかった久々津。

彼は呆然としつつも簪を助け起こして、ぶつかってごめんなさいと頭を下げ、再び本を抱えて運ぼうとしていた彼女のそれを半ば無理やりに奪い取り、何処まで行くのかと尋ねた。

簪は渋ったが、やはり自分では持つて行けそうにないと認めたのか、消え入りそうな声で「IS整備室」と呟き……そして今に至る。

「（何をしてるんだ、俺は…………）」

久々津は、己のとった行動を後悔していた。

別に助け起こす必要も無ければ、こうして本を運んでやる必要も

無かった。

適当に怒鳴り、舌打ちでもして立ち去れば良かったのだ。

なのに余りにも揚羽に似過ぎている彼女を見て気が動転し、つい手を貸してしまった。

だが、幾ら後悔しても後の祭りである。1度手を貸してしまった以上、途中でそれを投げ出すのは久々津の望むところでは無い。

約束は、守るものなのだから。

「（とにかく、さっさとこれを運んでしまおう）」

整備室まで行ってしまえば、最早付き合う義理も無い。

そう考え、久々津は歩を早めようとするが。

「……あの……久々津、君？」

「なんだ」

この上ないタイミングで、簪に声を掛けられる。

「やっぱり……自分でも、少し持つから……」

「ッ……要らん。よちよち歩かれる方が迷惑だ」

口調はいつも通りの冷たいものだったが、彼の内心は穏やかでない。

簪の声も、喋り方も、何もかも。

楯無の妹である以上、当然血縁上の母にあたる揚羽の生き写しだったのだから。

辛うじて表面上の冷静さを取り繕いつつ、久々津はなるべく簪を見ずに歩く。

……凝視してしまえば、今の状態さえ保てないと確信していた。

「わ、悪いと思うのなら……今度から、台車か何かを使え。……今回の様に、都合良く手伝う奴が居る事はあまり無い」

「うん……分かった。ありがとう」

「~~~~っ!!」

ふるふると、小刻みに震えつつも声を押し殺す。

見れば久々津の髪全体から、僅かだが煙が上がっていた。

改造人間である彼は汗をかかず、その髪の毛で余分な体温を放熱する。

彼の髪が異様に長いのはそれが理由であり、煙が上がるのは放熱量が上昇している証拠で、要するに照れているのだ。

「……どうしたの？」

「別に、にやんでも——」

噛んだ。

「……………別に、何でも無い」

「そ、そう」

無かった事にした。

久々津にとって1ヶ月よりも長く感じた数分の苦行を終え、2人はIS整備室の前で足を止める。

「ここでいいな……帰りはちゃんと台車を使え」

「うん……あの、ありがとう——」

「礼はもういい。ここに来るまで散々聞いた」

そしてその度に噛んだ。

「……………それじゃあな」

これ以上ボロが出る前にこの場を後にするべく、久々津は踵を返す。

だがその背に向けて、簪が呼びかけた。

「あ……ね、ねえ……久々津、君」

「なんだ」

くるりと振り返る久々津。

簪は気付かないが、ぷすぷすと髪から立ち上る白煙が先程より増しており、彼の限界に近い事を示していた。

「……えっと……最後にひとつ……聞いて、いい？」

「構わんが……早くしろ」

ああ、冷水を浴びたい。いつそ凍えるまで。

久々津がパンクしそうな頭の中で、そんな事を思っていたら。

「どうして……制服、黒なの？」

「……………」

結構な数の生徒が疑問に思いつつも、結局誰も聞けなかった不思議をあつさりと聞いてきた。

更識簪、割と侮れない子である。

「……………趣味だ」

事実はただの趣味だった。

「その……似合って……ない、よ？」

「ぐはぁ!？」

簪のひと言に、見事ノックアウトされる久々津。

その場に膝をつき、胸の辺りを押さえている。

そう。楯無にさえ出来なかった事を、簪はやってのけたのだ。

……それを彼女が自覚する事は、生涯無いだろうが。

「うっ、うっう……」

ついでに言えば、別に似合っていない訳ではない。

むしろ逆。けれど簪には、そう見えなかった。

そして――

「……白の方が……似合つと、思つよ……?」

「……………ッ!？」

何気無いものであつたらう、簪の言葉。

その言葉に、久々津の時が止まった。

……それは。

それと同じ事を、かつて。

『ねえ、『××××』。貴方には、白の方が似合つわ』

『そうか………？』

『うん、絶対そうよ』

かつて、揚羽が……

「久々津君？」

「……………あ」

放心していた久々津を、心配そうに簪が見ていた。

彼はかぶりを振って立ち上がると、すっと簪から目を逸らして。

「け……検討、しよう」

どうにかこうにか言葉を絞り出して、逃げるように立ち去った。

その夜。

「へ？ 制服白にしたの？」

「ああ、どう思う櫛寺」

「銀崎だっつの！ ……ぶっちゃけ、無いわ」

「……………」

その数分後、全身を殴打されて半死半生の状態で廊下に転がって
いた飛竜の姿が、生徒によって発見されたとか。

似合わないよ？（後書き）

揚羽と一緒にだった時の久々津はこんな感じ。

実はけっこう照れ屋さん。

つまんない

久々津・オテサーネクが、更識簪と予期せぬ出会いを遂げて数日。

「おねーさん、参上！」

「帰れ」

たった数日で実家から戻ってきた楯無と、もう1人の飛竜バカを何故か引き連れて、久々津は食堂に居た。

「おお、楯無会長！　いつ戻ったんですか！？」

「ふふふ、今日よイヤンクツ君」

「飛竜です！！」

……一生戻ってこなくて良かったんだが。

口に出すのも億劫な気持ちで、久々津はバカ2人を冷めた目で見る。
据える。

「久し振りね久々津君。おねーさんと会えなくて寂しかった？」

「寝言は寝て言え、淫乱女」

「な！？ わ、わわ私のどこが淫乱なのよ！」

「……………」

「そこで黙らないでよ！」

戻って来たばかりだと言うのに、やたらハイテンションな楯無。

飛竜も飛竜でいつもよりテンションが高く、正直久々津は相手にしたくない。

けれど毎度の事で楯無が付き纏って来て、その所為で飛竜まで付いてくる始末。

いつそ2人纏めてぶん殴って、気絶でもさせてやろうかと半ば本気で思った。

「ところで久々津君、制服白にしたのね。最初に見た時おねーさん

びっくりしちゃった」

「……文句でもあるのか」

「どうして？ 似合ってるじゃない」

黒も良かったけど笑う楯無。

「……………」

多分こいつが先日の更識簪と同じ事を言っても、俺は制服の色を変えたりはしなかっただろう。

黒は気に入っていたし、他人に言われて改める気など毛頭無い。

けれど……揚羽と同じ顔で、同じ声で、同じ事を言われて。

その結果が白制服だ。

……情けない。

「けどどうして？ IS学園は制服の規定が殆ど無いから、別に黒でも違反じゃなかったのに。イメチェン？」

「いや、教えてくんねーんですよこいつ」

真実などこいつ等に知られてたまるか。

それに以前、更識楯無は妹と不仲だみたいな事を飛竜^{バカ}が言っていた。

その話が事実なら、妹経由で姉に真相が行く事も無いだろう。

どうせ更識簪とはクラスも違うし、俺自身授業になど出ないからな。

もう会う事も無い――

「……………あ」

「ん？ どうしたんスカ楯無会長」

久々津が思案する中、ふと楯無が声を上げる。

「い、ごめんなさい！ ちょっとだけ匿って！」

「あ？」

「え、ちょ、どうしたんスカ！？」

何故か慌てた様に、テーブルの下に隠れてしまった楯無。

そしてそのまま脚へしがみ付いてきたので、久々津は舌打ちして振り払おうとした。

だが。

「あ……久々津君」

「っ！！？」

背後から聞こえた声に、その動きが止まる。

ギギギ、と壊れた人形の様な動きで首だけを振り返らせると、そこには。

「さ、更識」

もう会う事も無いだろうと思っていた少女が。

食事を終えた後だろうか、空の食器を盆に乗せていた簪が居た。

彼女はとてとてと久々津に歩み寄り、その格好に目を見遣る。

「……制服……白に、したんだ」

「あ、ああ。悪くは無い、助言感謝する」

「うん……やっぱり……似合ってる」

「~~~~ツ!!」

似合ってると言われた瞬間、髪から煙を上げる久々津。

外見上にそれ以外の変化は無かった為、彼の異変に気付いた者は皆無——否。

「……………（じい）」

テーブルの下から、楯無がジト目で久々津を見ていた。

どういう事だ説明しろと、隠れている立場にも拘らず無言の抗議を送っている。

けれど割とっばいいっばいな久々津は、全く気付いていない。

「え、なににに!？ 久々津、この子と知り合い!？」

「べ、別に知り合いつて程でも……ある」

「あるんかい!」

久々津が『ない』と言おうとして、一瞬悲しげな表情を見せた簪。故に彼は、反射的に180度真逆の事を言ってしまった。

「ふ、ふん……き、今日も整備室か？」

「うん……」

「そうか……お、重荷を運ぶ時はちゃんと台車を使えよ」

「うん……ありがとう」

「……ッ！　れ、礼など、言われる筋合いは……な、ない……」

尻すぼみな声で、ぼそぼそと言う久々津。

その後幾らか言葉を交わし、最後に手を振りながら簪は整備室へと向かって行った。

直後。

「どー言う事だ久々津この野郎！　簪さんと何故あんな親しげなんだ！」

「別に親しくは無い」

ぎゃあぎゃああと喚き立てる飛竜。

そしてずっとジト目だった楯無が、テーブルから這い出てくる。

心なしか、機嫌が悪そうだ。

「ふーん……そつかあ、久々津君は簪ちゃんと仲がいいんだ」

「だから、別に親しくは――」

「嘘だつ！ さっきの簪ちゃんの口振り、貴方が制服を白に変えた理由は簪ちゃんね！？ さあ吐きなさい、簪ちゃんとはどんな関係！？」

「先日荷物運びを手伝っただけだ。何度も似たような事を言わせるな」

「荷物運びを手伝った！？ お前が！？」

まるで宇宙人でも目にしたかの様な顔で、久々津を見る飛竜。

それもそうだ。普段の彼から考えれば、そんな事をするとは思えないのだから。

「……ずるい」

「はあ？」

「ずるいずるいずるいー！ 久々津君だけ簪ちゃんといチャイチャして！」

「意味が分からん……」

床に転がってじたじたし始めた楯無を見る久々津の目は、困惑の一色である。

と言うか下着が見えている。写メろうとした飛竜が蹴り飛ばされた。

「5歳のガキかお前は。さっさと立て」

「うう……だつてだつて」

拗ねながらも、立ち上がる楯無。

「俺が何してようと俺の勝手だろうが。何でお前が怒る」

「……………そうだけど」

続いた彼女の言葉は、如何な意味を持っていたのだろうか。

それは、久々津にも分からない。

そして今の彼には、分かつとする気も無かった。

「そうだけど……なんか……つまんない」

たてなしさん、がんばる

「ん？ あ、お前もしかして何か別のことと勘違いして——」

「ん、な！？ 何っ、んなわけっ——こ、こっ、このバカあああああっ——！」

購買のアイスを求めて寮の廊下を歩いていた久々津の耳に、バシン！と誰かが平手打ちでもされたような乾いた音が届く。

音の発生源は、1025号室。

自分と飛竜^{バカ}以外の、もう1人の男子——織斑ナントカの部屋であった。

「……夏だから、な」

くあくあと欠伸して、久々津は購買に向かう。

今日もIS学園は、平和だった。

「それにしても、クソ暑い」

購買でアイスを買い溜めし、ガリガリ君を啜えながら呟く久々津。

その肉体構造ゆえに汗はかいていないが、放熱機能を備えた彼の長い赤髪は、普段の3割増しの熱を帯びている。

アイスを齧っているのも、冷却の為だった。

「強化繊維も万能血液も、^{ブラック・ブラッド}熱くなり易いのが欠点だな……この気温じゃ放熱が間に合わん、発煙まではしないだろうが……」

現在体温セ氏46。50以上になると発煙、60を超える
とオーバーヒートで強制スリープ状態となり、体内のナノマシンが
急速冷却を開始する。

改造人間たるキメラとて、完全では無いのだ。

……まあ、髪を括って意図的に放熱効率を落としてもしない限り、そんな事態には及ばないが。

「所詮、人が作ったもんだからな……」

手っ取り早く、冷水のシャワーでも浴びよう。

そう思い、久々津は自室の扉を開けた。

「お帰りなさい。ご飯にします？　お風呂にします？　それとも、わ・た・し？」

「……………」

何故か楯無^{バカ}が部屋に居て、何故かその格好は裸エプロンだった。

しゃりしゃりしゃりしゃり。

暑さでこの際考えるのも面倒だった久々津は、取り合えず啜えていたガリガリ君を素早く食べ終え、無言のまま部屋に入った。

当然、頭にキーンなど来ない。

キメラは高温にはやや弱いが、低温にはとても強いのだ。

「……………」

「ちょ、ちよつと！？　ねえ、せめて何か反応してよ！」

「……あ、これを冷凍庫に入れといてくれ。溶ける」

大量のアイスが入ったビニール袋を手渡し、足早に脱衣所の扉をくぐる久々津。

ついでにどうでもいい事だが、飛竜は出かけているのでこの場に居ない。

後日この事を知り、死ぬほど後悔したらしい。

「アイスなんてどうでもいいのよ！　下に水着とか着てたら何となく負けな気がして、本当に裸エプロンにしたのに！　ノーリアクションとか、まるで私が普段からこういう事してるって思われてるみたいじゃない！！」

「事実だろう。喚くな痴女」

「違うわよおおおおつ！！！！」

楯無の叫びなど無視して、彼は冷水シャワーを浴び始める。

やはり今日も、IS学園は平和だった。

「……ん、体温正常。アイスと冷水が効いたな」

「くすんくすん……」

「まだ居たのかお前」

久々津がシャワーから上がると、彼のベッドに腰掛けて泣き真似をしている楯無が居た。

服は制服に着替えており、アイスもしまってくれたらしい。

「酷い、酷いわ久々津君……おねーさんが肌まで晒してあげたのに、
よりによってノーリアクションなんて……」

「過剰な反応を期待するなら、五所川原にやればいいだろう。あい
つなら恐らくと言うかほぼ確実に、理性を崩壊させて襲ってくれる
ぞ」

「……イヤンクツ君に見せるのは、いや」

正式名称は銀崎飛竜である。

この2人、実のところ本気で飛竜の名前を覚えていない。

「で、何の用だ。今日の仕合いは2時間ほど前にやったと思うが？
サマーソルトキックを顎に食らってノックアウトしたお前の敗北
で終わった」

「あれ、痛かったわ。咄嗟に身を引かなかったら顎が砕けてたじゃない、私じゃなかったら入院ものよ」

「お前だからやったんだ。現に受け身は出来たろう？」

「……その言い方は、おねーさんずるいと思うの」

暗に、実力を信用していると言われた様なものだ。

ついで目を逸らした楯無の顔は、少し赤い。

「……で？ 本当に何の用だ」

対面となる様に椅子に座り、楯無を見る久々津。

「……………それは」

「それは？」

「……………その」

「……………？」

いつになく歯切れが悪い。

何故か楯無はさつきよりも頬の赤みが増えており、様子がおかしかった。

もじもじと身体を揺すり、手をポケットに伸ばしては引っ込めている。

「何かあるならはつきり言え。用が無いなら帰れ」

「あ、あるわ。あるの。いま言うから……………」

すうと息を吸い、意を決したらしくポケットに手を突っ込む楯無。

「……………あの、ね？ 良かったら、本当に暇だったらでいいんだけど」

そこから何か取り出し、そして――

「あ、明日の土曜日っ！ 私と……ここに、行きましょう？」

「今月オープンしたばかりのウォーターワールドのチケット2枚と、『特別外出許可証』と書かれたカードを、久々津に突き付けて。」

ふるふると指を震わせながら、そう言った。

ウェルカム・イン・ザ・サマー

夏休みと言う事もあり、雑多な賑わいを見せる町並み。

その中を軽快な足取りで歩く、私服姿の楯無が居た。

「
♪♪♪
」

鮮やかな水色の髪がきらきらと陽光を跳ね返し、絶えず人目を集める。

そして彼女の群を抜いた美貌に、男女問わず見惚れていた。

「
ふふっ
」

この上なく嬉しそうな笑みをこぼす楯無。

くるりとその場で1回転し、やや丈の短いスカートの裾が優しく舞う。

「おい見ろよ、ほら。すっげえ美人」

「どっかのモデルかな？」

雑踏から聞こえるそんな声は、しかし楯無には届いていない。

今、彼女の思考を埋めているのは、今日これからの事なのだから。

ちらと、腕時計の針を確かめる。

「（10時ちょうど位には着くわね……少し早く来すぎたかしら？）」

待ち合わせの時刻は10時半。30分も早く来てしまった。

だがそれも仕方ないと、楯無は思う。

何せ駄目元での誘いがOKされたのだ。急くなと言う方が無理。

……正直、絶対来てくれないと思っていた。

『プールか。塩水よりはマシだな、いいだろう』

ふと思い出す、昨日の彼の台詞。

これは多分奇跡に近い。そう巡っては来ない奇跡だ。

彼は私と一緒にだと、いつも迷惑そうだから。

「……………」

きつと嫌われてるんだろう。

そもそも好かれる理由が無い。出会い自体は悪くなかったけどその後は最悪だったし、私自身も最初は彼を半ば敵扱いしてた。

だけど。

『訳が分からないって顔してるな。要するに、またチャンスをやると言ってるんだ』

あの日、彼と初めて出会って。戦って、手も足も出せずに敗北した日。

お母さんへの手掛かりを得る事に必死で、退かなかつた私に彼はチャンスくれた。

その時の彼の顔を、私は決して忘れない。

ほんの少しだけ、笑っていて。

それでいてどこか泣きそうだった、彼の顔を。

「……………ん」

私もバカじゃない。

彼がお母さんの事をひた隠しにする理由は、なんとなく見当がついている。

そしてそれが正しいのなら――

「……………だから、それを」

今日、確かめよう。

勝負には勝っていないけれど、きっと彼は教えてくれる。

だってあの人は、皆が思っているよりも、彼自身が思っているよりも。

ずっとずっと、優しいのだから。

「……………」

確かめたい事は、もうひとつある。

そっちはまだ心の中で蓋をして、その時までしまっておこう。

「うんっ」

確認。それが今日の目的の半分。

ちなみに、もう半分は。

「久々津君の、し・ふ・く〜」

……彼の私服姿と水着姿だけど、文句あるの？

ジャスト10時に、待ち合わせ場所であるウォーターワールドのゲート前に到着した楯無。

するとそこには、既に久々津が居た。

「……来たか」

建物の壁に寄り掛かって目を閉じていた彼は、楯無が近付くと声を掛ける前にその双眸を開く。

流石気配に敏感だと、彼女が感心したのは言うまでも無い。

「……早いね、久々津君」

「久し振りの外出だ。朝飯を外で食べていた」

普段何も言わないが、やはり外に出られないのは結構なストレスなのだろう。

久々津の声音がいつもより少しだけ機嫌良く、楯無はそれだけでも今日誘った甲斐があったと内心で喜ぶ。

「私服、素敵ね」

「……適当に買った安物だ」

紺のダメージジーンズと、薄手の黒い長袖シャツ。

シンプルだが、彼の細身と長い手足がマッチして、良く似合っている。

と言うか美形は何を着ても似合う。

「さ、行きましょう?」

「……………ああ」

微笑みかけ、顔を赤くしながら。楯無は久々津の手を取る。

彼は少しだけ眉間に皺を寄せ、酷く迷惑そうな様子だったが。

それでも、振り払おうとはしなかった。

「セシリア、よく聞きなさい。一夏は来ないわ」

「はい？ ええと……なぜ？ と言うか、どうして鈴さんが……？」

「今日、あたしとあんたがデートすんのよ！」

「え……ええ！？ わ、わたくしは一夏さんに誘われてここに――」

「だから！ そのチケットは元々あたしが用意したの！ わかる！？」

久々津達が建物に入った少し後。

ゲート前で怒鳴りあっている、2人の少女が居たとか。

ウェルカム・イン・ザ・サマー（後書き）

ベタなナンパ男とか出したかったけど、久々津的に絶対助けないからやめた。

@クルーズ

「俺はコーヒーにでもしよう」

「……じゃあ、私パフェ……期間限定のやつ……」

ファミレスのテーブル席に差し向かいで座り、メニューを見ながら言う2人。

……ウォーターワールドに居た筈の彼等が、何故こうしているのかと言えば。

「それにしても、まさかプールが半壊するとはな。流石に予想外だった」

「予想できる方が……どうかしてるわ……」

そう。2人がウォーターワールドで休みを満喫していた傍ら、ちようど行われていた水上ペアタッグ障害物レースに参加していたセ

シリアと鈴が最後の最後で仲間割れ、ISまで持ち出した大喧嘩を始めたのだ。

それにより施設は一部崩壊。遊ぶどころの話では無くなってしまった。

奇跡の産物であるデートに水を差され、楯無は大いに落ち込み。

「あの2人……覚えてなさい……」

そしてかなり怒っていた。

「まあ、少し楽しかった」

「楽しかったの!？」

「騒動に巻き込まれるのは甚だ御免だが、見てる分には面白い」

クク、と冷たい笑みを浮かべる久々津。

楯無はどうしてこう捻くれた笑い方しか出来ないのかとも思ったが、珍しく彼が上機嫌だったのであえて何も言わない。

「ククク……さて、注文をするか。おい、その店員」

「あ、はいっ」

久々津が近くを通りかかった店員を呼び止め、こちらに来させる。
すると。店員の方が、驚いた風に。

「え、あれっ？ 久々津君！？」

「……ん？ 誰だ」

金髪を後ろで括り、燕尾服に袖を通した中性的な少女。

けれど人の名前と顔を覚えないう々津には、一切の見覚えが無い。

小首を傾げていると、今度は左眼に眼帯をした銀髪メイドが寄って来た。

「どうしたシャルロット、クレーマーでも居たか」

「あ、ラウラ。いやそうじゃなくて、ほら」

「……む」

シャルロットの示す先を見たラウラが、若干顔を顰めた。

まあ久々津は楯無や簪、そして飛竜以外の生徒達からよく思われていないから、これも当然の反応と言えば当然である。

「誰かと思えばサボリ魔か。何故ここに居る」

「……馴れ馴れしく話し掛けるな。誰だお前等」

険悪な空気を散らす2人。

間に入っただのは、楯無だった。

「誰ってほら、シャルロット・デュノアちゃんにラウラ・ボーデヴィツヒちゃんでしょ？ 貴方と同じクラスで、専用機持ちの」

「……………知らん」

「臨海学校の時にも、一応会ってるんだけどね……………」

さっぱり記憶に無い。

久々津がIS学園の生徒で顔を覚えている面々など、担任の織斑と副担任の山田、そして飛竜バカと更識姉妹ぐらいであった。

腕組みをして記憶をさらっている彼をよそに、シャルロット達は楯無に目を向ける。

「えっと……それで、貴女は？」

「あは、おねーさんの名前は更識楯無。学園の2年生よ」

「やはり思い出せん」

ひらひらと手を振る久々津。

決して記憶力は悪くないのだが、興味の無い事は脳が覚えな
いら
しい。

「とにかく注文だ。ブルマンをひとつ、期間限定パフェをひとつ、
さっさと持ってこい」

「あ、うん。ごめんね、デートの邪魔して」

伝票に注文を書きとめ、厨房へと去って行くシャルロット。

ラウラも最後に久々津をひと睨みして、接客に戻った。

「でもあの子達、どうしてバイトしてるのかしら？」

「知らん、どうでもいい、興味無い」

「ホント、辛辣ね……」

どうしてこう毒ばかり吐くのだろうか。

もう少し口調を優しくすれば、学園でもさぞやモテるだろうにと楯無は思う。

ああでも、それはそれで困る――

「（……どうして？ どうして困るの？）」

ふとこぼれた感情が、自分でもいまいち理解できない。

こんな感情^{おもい}、今まで誰にも抱いた事は無かった。

頭の中を埋め尽くしそうになるそれを振り払い、楯無は考える。

「（……そうよね。考えてみれば、辛辣にもなるわよね）」

久々津は改造人間だ。

彼が如何な人生を送って来たか、楯無は知らない。けれどその道のりは、きつと想像を絶するほどに辛いものだったろう。

そんな経験が、彼の優しさを心の奥底に閉じ込めてしまった。

だから辛辣になる。だから悪を演じる。

そんな生き方しか、彼は知らないのだろうから。

「……………」

ちょうどいい。今、確かめよう。

私の中で確かなものになりつつある真実の仮定を。

決意して、思考を言葉として口に出すために、息を吸い込んで――

「全員、動くんじゃないか、ねえ！」

この上ないタイミングで入って来た強盗達に、遮られた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776z/>

ただ、それだけを知りたい

2012年1月7日12時49分発行